

大原墳墓群調査報告書

1984

磐田市教育委員会

大原墳墓群調査報告書正誤表

頁數	行數	誤	正
例言	8	小宮駕行	小宮駕事
タ	14	瀬戸市史民資料館	瀬戸市立歴史民俗資料館
補圖目次	10	石造遺物出土実測図	石造遺物出土状態実測図
図版目次	2	K3~3	K4~3
1	5	高さを減じ	高さを擴じ
2	遺跡分布図	Sの位置を北へずらす	
		⑥櫛原遺跡	⑥長江崎遺跡
		⑦長江遺跡	⑦野原遺跡第3地点
		⑧野原遺跡	⑧第1、2地点
5	17	谷が伸び	谷が延び
7	スケール	4.0cm	4.0m
12	32	法被印拂並出土	法被印拂並出
13	30	夷方裏	夷方裏
17	22	方方形蓋	長方形蓋
23	3	基底径	基底径
19	第1表に表示	一覧表に表示	一覧表に表示
24	上円下方基	上円下方基	
28	第1表に表示	一覧表に表示	一覧表に表示
24	19	13基	13基
25	12	第1表参照	一覽表参照
26	5	墨色土層	黑色土層
27	9	土壤内部	土壤内部
11	赤褐色土層	赤褐色土層	
11	墨色土層	墨色土層	
12	上部の層	土壤の層	
28	22	現墓丘表上層	現墓丘表土層
29	6	露れ	現れ
14	西側	南側	
16	東側	北側	
17	土壤	土壤	
19	土壤	土壤	
29	これが、これは	これは	

頁數	行數	誤	正
	27	土氣	土壤
30	7	誤であるが	粗であるが
	9	寄りに	西寄りに
	32	発見された方1	発見された第1
	33	第2埋葬式とかけはなれ	第2複数埋葬式とかけはなれ
31	23	全体を被うている	全体を被っている
	32	梵字を書いた	梵字を書いた
	第9図	石造遺物出土状況実測図	石造遺物出土状態実測図
40	第14図	断面透視図	断面透視図
42	18	夷謡系	夷謡系
	22	御前き	御前き
	24	全体に導く	全体に導く
	25	口唇部	口端部
	26	顎骨部	顎部骨
	27	粘土輪	粘土輪
43	22	草文	蓮弁文
	29	粘土盤差上げ手法	粘土鉢巻上げ手法
	33	更	壹
	33	(第17図1~3)	(第17図1~3)
	34	壹112	壹112
		常滑高系の壹	常滑高系の壹
44	4	壹3	壹3
	7	針行模文	斜行模文
	8	第Ⅳ型式の	第Ⅲ型式の
	17	内部に	外縁に
	17	藉っている	誇っている
	20	玉辭状に	玉辭状に
45	7	三耳壺骨器9(第17図9)	三耳壺骨器(第17図9)
	10	同図3は	同図3には
	15	(国版第3~2)	(国版第7~2)
	19	全高は	全高は
	25	高台は	高台高は

頁數	行數	誤	正
46	7	器皿	器皿
47	4	に應	口徑
	19	強上	胎土
	折影図	照影系切底	照影系切底
48	2	宝鏡印塔	宝鏡印塔
	10	創出する	件出する
	10	併出遺物	併出遺物
	20	No24~1~2~28	No24~1~2~28
	22	革弁八重蓮花を刻み	革弁八重蓮花を彫み
	23	No28~42	No28~42
49	第2表		単位はcm
	40	九輪下部	九輪花部
	40	の***は最も低いもの高さをもたらして 隠匿は高さをもたらして	隠匿は高さをもたらして
51	63	裏面は磨かれている	裏面は磨かれている
	40	裏面は磨されていない	裏面は磨かれていない
	49	ノミの跡が	ノミの跡が
	45	底の縫のつくり	底の縫のつくり
53	34	梵字	梵字
54	第4表	風船部名	風船部高
	15	垂きで	垂きで
55	2	三分割に大溝	三分割に大溝
	20	界界は不明	境界は不明
56	11	小型である	小形である
	23	対比ながら	対比しながら
60	第4図	押印板木	押印板木
72	6	多種多様	多種多様
73	9	範底	窓基
	14	宝鏡印塔	宝鏡印塔
國版第4	上段	出土状態	出土状態
國版第8	I類1~9	I類4~9	I類4~9

大原墳墓群調査報告書

1984

磐田市教育委員会

序 文

豊かな自然に恵まれた磐田市域には、磐田原台地を中心にして貴重な文化財が数多く遺存しています。

特に埋蔵文化財の宝庫として全国的にも著名な地域であります。

本大原墳墓群は、築造を誇った磐田の古代から中世へと引き継れていく、中世・近世の数少ない貴重な文化遺産であります。

伊勢神宮御厨として栄えた中世の村落研究の資料として欠くことのできない遺跡として学界の注目を集めています。

東部工業地域造成のさきがけとして緊急調査を実施して以来、すでに十数年の歳月がすぎ、遅きに失した感がありますが今般、調査報告書の刊行の運びとなりました。

本書が磐田の中世・近世史研究の資料として活用されるとともに、広く市民の皆さんの歴史への関心と文化財へのご理解と御協力をいただき一助となれば幸甚であります。

なお、調査にあたり直接発掘作業に従事していただいた諸先生方、学生の皆さん、貴重なご指導やご援助をいただきました文化財専門審議会委員の先生方を始めとする文化財関係各位、ならびに格別のご配慮を賜りました、地元関係者、市開発関係各位に心からお礼を申し上げます。

昭和 60 年 3 月吉日

磐田市教育委員会

教育長 浅井重典

例　　言

1. 本書は、磐田市教育委員会が主体となり昭和42年2月より同年5月まで実施した大原墳墓群の調査記録である。
2. 本調査は、遠江考古学研究会会員、国学院大学学生諸氏の協力によって実施されたものである。（協力者氏名別記）
3. 本書の執筆は担当者、平野和男が行った。
4. 本遺跡より出土した遺物整理、復元、実測作業は、松沢　修・柴田　稔尚氏が主として行ったが、今回、山崎克巳・鈴木節司・小宮猛行氏の協力を得て補充した。石造遺物実測は土として小宮氏が行った。
5. 調査記録の整理、実測図トレースは主として市野浩世氏が行った。
6. 遺物写真は、山村住人、山崎克巳両氏が撮影した。
7. 本書の刊行にあたっては、山村　宏、伊藤美鈴、小林ゆり、加藤恵子各氏よりご教示と協力を得た。
8. 陶磁器については、瀬戸歴史民俗資料館、宮石宗弘・藤沢良祐氏、愛知県立陶磁資料館中野泰裕氏にご教示を得た。

目 次

I.	位置と環境	1
II.	調査の経過	4
III.	調査の方法	4
IV.	墳墓群の構成	5
1.	西地区(A群、B群、C群、D群)	23
2.	東地区(E群)	24
V.	近世墓	25
1.	B2-10号墓	25
2.	B2-4号墓	26
3.	Z5-3号墓	26
4.	C2-1号墓	27
5.	K4-3号墓	28
VI.	中世墓	28
1.	K13-1号墓	28
2.	H18-1号墓	29
3.	L15-2号墓	29
4.	M14-1号墓	30
5.	M15-1号墓	30
6.	N17-2号墓	31
7.	K13-2号経塚	31
VII.	出土遺物	42
1.	陶磁器・かわらけ類	42
2.	石造遺物	48
3.	その他	56
VIII.	むすび	72
	あとがき	73

挿 図 目 次

第1図 大原墳墓群周辺遺跡分布図	2
第2図 大原墳墓群位置図	3
第3図 大原墳墓群全体図	7
第4図 蓮弁文及び押印拓本	60
第5図 B2-10号墓墓丘平面図及び断面図	33
第6図 B2-4号墓墓丘平面図及び断面図	34
第7図 Z5-3号墓墓丘平面図及び断面図	35
第8図 C2-1号墓墓丘平面図及び断面図	34
第9図 K4-3号墓石造遺物出土実測図	32
第10図 K13-1号墓墓丘平面図及び断面図	36
第11図 H18-1号墓墓丘平面図及び断面図	37
第12図 L15-2号墓墓丘平面図及び断面図	38
第13図 M14-1号墓墓丘平面図及び断面図	39
第14図 M15-1号墓墓丘平面図及び断面図	40
第15図 N17-2号墓墓丘平面図及び断面図	41
第16図 大原墳墓群出土藏骨器実測図I	61
第17図 大原墳墓群出土藏骨器実測図II	62
第18図 大原墳墓群出土藏骨器実測図III	63
第19図 大原墳墓群出土かわらけ実測図	64
第20図 大原墳墓群出土宝塼印塔実測図	65
第21図 大原墳墓群出土五輪塔及び一石五輪塔実測図I	66
第22図 大原墳墓群出土一石五輪塔実測図II	67
第23図 大原墳墓群出土一石五輪塔実測図III	68
第24図 大原墳墓群出土一石五輪塔実測図IV	69
第25図 大原墳墓群出土一字一石経石実測図I	70
第26図 大原墳墓群出土一字一石経石実測図II	71

図版目次

- 図版第1 K3-3号墓 石造品出土状態
- K4-4号墓
- 図版第2 N8-12号墓
- K4-15号墓
- 図版第3 N8-1号墓
- K13-1号墓
- 図版第4 N17-2号墓
- K13-2号経塚
- 図版第5 藏骨器I
- 図版第6 藏骨器II
- 図版第7 藏骨器III
- 図版第8 山茶椀・かわらけ
- 図版第9 石造品I(宝瓶印塔)
- 図版第10 石造品II(一石五輪塔)
- 図版第11 一字一石経石I
- 図版第12 一字一石経石II

I. 位置と環境

大原墳墓群は磐田市の市街地を形成している、東海道本線磐田駅より約2kmほど東方に位置し、行政区は磐田市鎌田字大原地内に属している。

大原墳墓群の所在する鎌田地内は、地形的には、磐田原台地の東南部は洪積台地が高さを減し、沖積地と接しており、大小の侵蝕谷が入り込み、短く低い丘陵を形成しているが、最南端を占めるのが、鎌田丘陵である。本遺跡はこの鎌田丘陵の西側の基部に位置している。

本丘陵東側は、すぐ東に流域をもつ太田川流域の平野に接し、南は広大な海岸平野に接しているが、さらに大原地区について精緻な説明を加えれば、鎌田丘陵西側の鍾影・坊中地区的沖積地より浅い侵蝕谷が入り込み、その谷頭を形成している地点に相当している。この侵蝕谷をはさんだ台地の東西の平坦面を中心にして墳墓が築造されている。

洪積台地と沖積平野の接点に位置しているため、自然環境に恵まれ、周辺地域には多くの文化財が存在している。

大原墳墓群の西南約500mほどへだてた地点には、繩文中期から晩期にかけて形成された西貝塚があり、東海地方の代表的遺跡にあげられている。

大原地区の南に開けている鍾影から坊中・長江地内の沖積地と台地の接するところには、弥生時代から、鎌倉・室町時代の中世にかけて各時代の集落跡が推定されている。鍾影・野際・長江崎遺跡が存在している。

古墳も周辺地域には数多く存在している、約200mほど東にあたる鎌田丘陵上には、著名な松林山古墳（前方後円墳・四世紀後半）を主座とし、高根山古墳（円墳・五世紀）めかくし山古墳（円墳・五世紀）等の大型円墳を始め、後期群集墳多数から形成されている松林山古墳群が存在している。

西方約300mほどの地点には、堂山古墳（前方後円墳・五世紀前半）があり、西北約200mのところに、安久路丸山古墳（円墳）安久路2号、3号墳（ともに円墳・5世紀）を中心とした五世紀代の大形円墳よりなる古墳群が存在している。

これら有力な古墳群を築造したのは、前述の各遺跡を支配した大小の首長層であったと推考される。

奈良時代の「山名郡」に相当する地域であり前述の集落を中心にして栄えていたことは出土遺物から推定できる。鎌田丘陵尖端部に位置する、現全久院境内より多数の布目瓦が採集され未調査のため正確な資料に欠けるが、奈良・平安期の寺院跡の存在が推定される。

また、文献資料では、鎌田地域は平安期より鎌田御厨の名が知られている。御厨の成立した過程、年代については明らかでないが、東鑑、養和2年（1182年）5月12日の記事に、延長年間（923年～931年）よりすでに御厨であったと主張している文書がある。「平安遺文」中に光明寺文書として、康和4年11月（1102年）遠江国司との争を訴えた神主らの注進状が残されている。

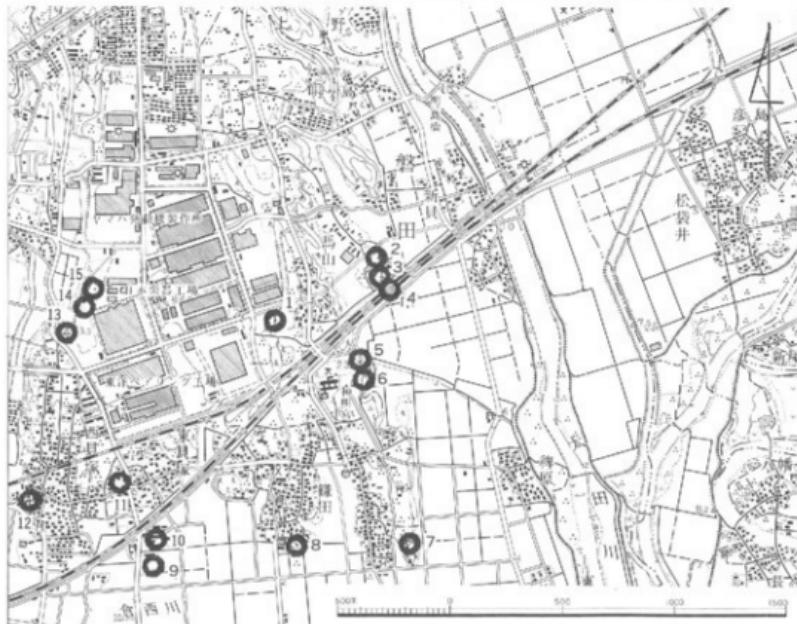
これらの文献から、延長年間の10世紀成立説はともかく、11世紀後半から12世紀初頭には鎌田御厨は成立していたことは明白である。その後の鎌田御厨の変遷については断片的であるが記録をたどることができる。

室町時代までは神領として神宮が把握していたものと考えられる。南北朝時代、正平7年、(1352年)足利尊氏が遠江国人、松井助宗に御厨内の稗原・和口郷など御厨の一部を恩賞として与えた記録が残っている。戦国時代も今川氏より松井一族に知行安堵が与えられ、14世紀後半から16世紀後半までは松井氏の知行地となっている。

近世は天領となっている「山名郡御厨庄鎌田郷」のうち100石は鎌田神明宮の朱印地となっていたが、その地域については定かにしがたい。その他、旧御厨の各村については、旗本支配地、代官支配地に加え社寺領等が複雑に入りこんでいる。

いずれにせよ、太田川流域から台地南にかけて開けた沖積平野は肥沃でしかも安定していたため、農耕社会に転換した弥生時代以来農業が主な生産手段となっていた古代、中世から現代に至るまで、各時代の農村集落を支え繁栄をもたらして來た。

こうした中世・近世の地域社会を背景として大原墳墓群は成立していたものである。



第1図 大原墳墓群周辺遺跡分布図



第2図 大原墳墓群位置図（明治25年陸地測量部見付2万分の1）
（▲印が大原墓地）

II. 調査の経過

遺跡現況

大原墓地は約3,200m²に及ぶ広大な面積であり、墓地の中央部は南に伸びる侵蝕谷の最深部にあたり低い溝地となり地形的には、墓地を東西に二分した形となる。この低地部には墓所は築造されず、東西丘陵の平坦部から斜面にかけて墳墓は築造されている。

墓地の中央よりやや北寄りの地点に磐田市新貝から同西貝塚へ通する市道が東西に横断し、墓地を南北に両断した形となっている。

また、墓地内には不規則な形で東西・南北に墓参のために小路が通じて墓地内を区画している。

この墓地内には中世墳墓から現代までの長い期間に亘って前記のように、地元旧19ヶ村の墓地となり多数の墓が築造された。

大原墓地整理事業が決定し、大原墓地内に所在する各家の墓所がそれぞれ檀家になっている各寺院の墓地に移転が行われ、大原墓地内には祀る者のない無縁の中・近世墓が残された。

この大原墓地内に工場建設が計画されたため、造成工事着手前に墓地内に残された墳墓群の調査を、昭和42年2月から同年5月まで実施した。

調査前の墓地の状況は、土盛りした小規模な墳丘を有する墳墓や、さらに墳丘上に後世になって、近・現代の墓が営まれていたものが今回の墓地移転により掘り返され、旧墓石や蔵骨器の破片が散乱しているなど茫茫たる風景で鐵鬼草紙の画をしのばすものがあった。

調査対象地域内には少数の中世墓と近世墓は未確認のものを加えれば、350墓をこえるものと推定された。

今回の墓地移転で、大半が現代墓のため掘り返されて破壊されている現状のなかで、発掘調査を実施したものは少数の89基である。

III. 調査の方法

広域に及び、しかも擾乱の激しい遺跡の現状のなかで、概数約350基以上と推定される墳墓群を、1. 正確な位置と数を把握する。2. 各遺構の関連を解明する。3. 中世・近世・近代・現代に及ぶ各時代別墳墓の把握と分布。5. 大原墓地の成立過程を追究するために、遺跡の微地形のなかで、また、周辺地域の地理的環境のなかで、どのような位置、占地をしているか正確にプロットすることが基本的作業として必要である。

上記の調査上の条件を満たす調査方法について検討した結果、調査対象地域全域に10m四方のグリッドを設定し、各墳墓をグリッドで区内に位置づける方法を実施した。

現地におけるグリッド設定作業は、遺跡全域が見通せる遺跡のほぼ中央部に原点を求め、この原点を軸として、東西・南北方位の基準軸線を設定し、基準軸線上に、10mごとに区画点を

設けた。北位は10区画、南位は7区画で現存する墓域は終っている。

東西軸では、西位に9区画、東位に14区画した地点で墓域は終っている。両軸線では、墓域は東西230m、南北170mの範囲に及んでいることが判明した。

この基準軸を基点として全域に10m方眼のグリッドを設定した。このグリッドの名称は縦軸の北側からA～Pまでのアルファベット記号を付し、横軸の西側から1～23まで算用数字を付した。調査区の西北隅がA 1区、東南隅のP 23区と呼称することとした。しかし、A区よりさらに北側に一部地域で墳墓が築かれているのが認められたので、A区の北側に10m延長しZ区を設けることにした。

調査の整理上、全域に築造されている墳墓の名称は、所在しているグリッドの区記号を頭に付し、例えばA 1-1号、A 2-1号墓。同一区内に多数所在する時は、西位のものから、A 1-1号、A 1-2号と呼称することとした。1基が二区にかかって存在している場合は墓丘が多くかかっている区名を付すこととした。

具体的に発掘調査が進み、より精細な墳墓平面図、遺構断面図等の測図類はすべて、各区画境の測量杭上のポイントを記録することで全体図に位置づけが可能となる方法をとって墓域全体の調査を進めることとした。

IV. 墳墓群の構成

大原墓地は前述のように、墓地中央部に南からの侵蝕谷が伸び谷頭を形成しているため低地となっている。

この侵蝕谷によって東西に丘陵が二分され、それぞれの丘陵上に墳墓が築造されているため、調査の便宜上、東地区・西地区に大分して呼称する。

両地区内の墓丘を有する墳墓の分布を観察すれば、いくつかの群に分類することが可能である。この点については特に、西地区に顕著に認められる。東地区については、丘陵平坦部と丘陵斜面に築かれた墳墓との間には、規模の大小、外観等の差異が認められ群の構成を区別することが必要になると予見される。ただし、所在する地域からは両者を区分するのは困難である。

所在する地域を中心にして大原墓地内の墳墓を分類すれば次の通りである。

西地区の西北部を占めるB・C-2・3区を中心にして約50基の墳墓が所在しているがこれをA群とする。

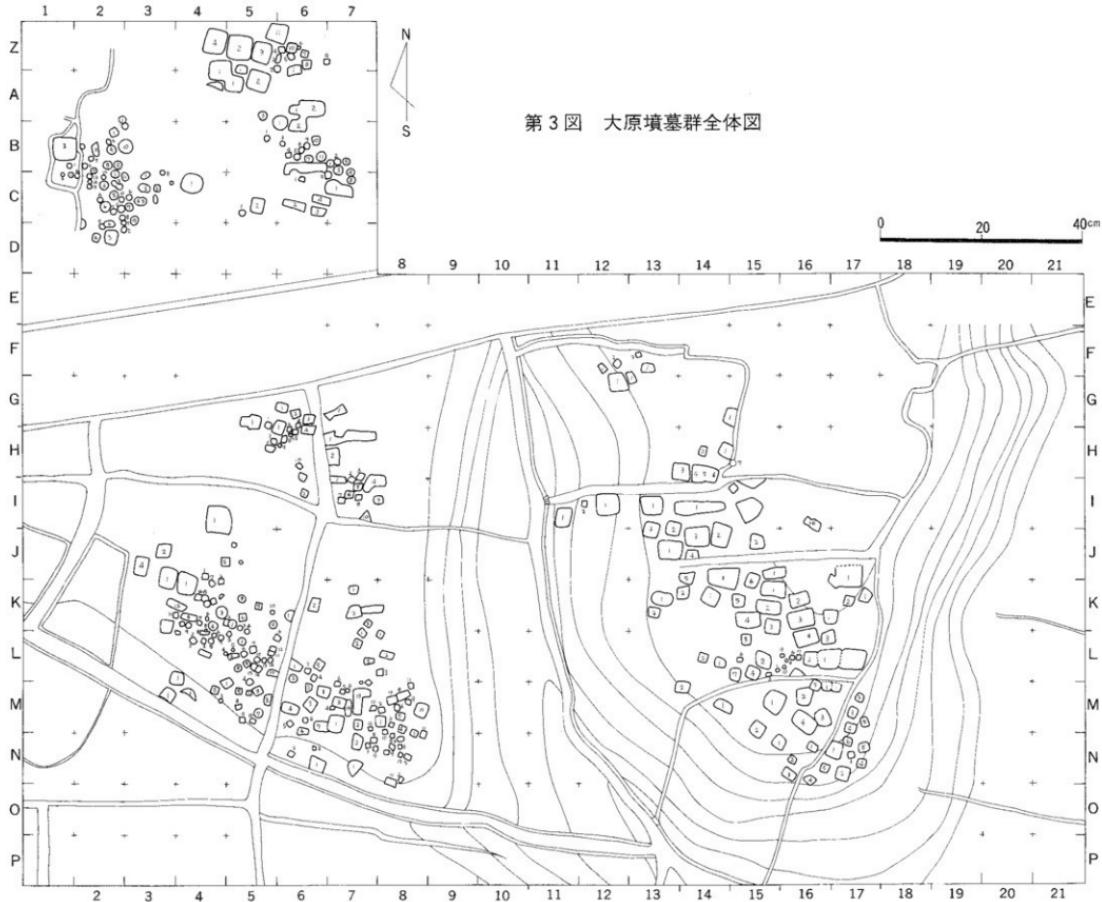
A群の東に位置するZ・A～D区を中心に築造されている49基をB群と呼称する。

B群の南位30mほどへだてたG～I区にある1群約33基をC群として区画した。

C群から南に丘陵縁部に沿って約141基をD群とした。

東地区的丘陵上に築造されている1群はきわめて多く、E群とした。E群は丘陵平坦部に築造された1群と丘陵縁部に沿って築かれている1群とは区別することが必要かとも予想される。

次に、各群について説明する。



大原墳墓群一覧表

A 群

〈墳墓名称〉	〈規模、遺構出土品等〉
A 1-1号墓	規模径1.2m、円形墓。破壊未調査。
B 1-1号墓	規模径1m前後、円形墓。破壊未調査。
B 1-2号墓	規模一辺6×4.8m、高さ1.25mの方形墓、墓丘より0.8m前後で焼土層を検出。墓丘盛土内より、かわらけ破片1括、寛永通宝1枚、人骨片、特別な埋葬施設は認められない。
B 2-1号墓	規模径2m円形墓。かわらけ片出土。破壊。
B 2-2号墓	規模0.8×1m長方形墓。破壊。
B 2-3号墓	規模径2.8m円形墓、墓丘中より人骨片、かわらけ破片出土。
B 2-4号墓	規模、一辺1.6mの方形墓、墓丘盛土中より、木炭片、焼土、人骨片が発見されている。墓丘下に長径1m短径0.68mの横円形の土壙、内面は焼土壁となっている人骨片、永楽通宝1枚出土。
B 2-5号墓	規模径1m前後円形墓。破壊未調査。
B 2-6号墓	規模径1.2m前後の円形墓、現地表より0.2m焼土・木炭層あり、鉄釘、人骨片、銭、陶器片
B 2-7号墓	規模径1.4m前後の円形墓。破壊。
B 2-8号墓	規模径2m前後円形墓。盛土中より人骨片出土。
B 2-9号墓	規模径1.6m円形墓。破壊。
B 2-10号墓	規模径2.9m円形墓埋葬土壙三ヶ所が発見された。第1・第2土壤より出土品なし、第3土壤より、人骨片、鍔針、銅錢が出土している。
C 1-1号墓	規模径1m円形墓。破壊。
C 1-2号墓	規模径0.8m円形墓。破壊。
C 2-1号墓	規模径1.6m、高さ0.3m円形墓、焼土ブロック、焼骨片と銅錢2枚出土。特に埋葬施設なし、墓丘下層の土壙で火葬したものと考えられる。盛土の下に、旧地表下1.6m前後の土壤、壁面焼けている。かわらけ片若干、五輪塔空、風部各1点出土。
C 2-2号墓	規模径1.8m前後の円形墓、焼土ブロック、人骨出土。
C 2-3号墓	規模径1m前後の円形墓が接続して築かれているためひさご形を呈している。破壊。
C 2-4号墓	規模径1.9mの円形墓。現墓丘下0.3~0.4mで木炭片、人骨片、焼土が散在、特別な埋葬施設は認められない。銅錢6枚、針1本、かわらけ片出土。茶毬に付した場所か

- ら散骨して埋葬されている。
- C 2 - 5号墓 規模1.9m前後の円形墓、焼土、木炭もない。かわらけ片少量出土。
- C 2 - 6号墓 規模径1.9m円形墓。壇丘の高さは約0.2m。地山を1.17×0.78m深さ0.3mの規模で掘り下げた土壤で火葬している。土壤内焼土、木炭、人骨片がつまっていた。火葬所の上に壇丘を築いたものである。
- C 2 - 7号墓 規模1.4m前後の円形墓。墓丘高さ0.2m。地山を0.8×0.9m深さ0.2m前後掘り下げた土壤が発見されている。土壤内には焼土、木炭片、人骨片がつまっている。針釘、かわらけ片出土。
- C 2 - 8号墓 規模径1.4m前後の円形墓、特別の施設なし。かわらけ破片出土。
- C 2 - 9号墓 規模径1.4mの円形墓。出土品なし。
- C 2 - 10号墓 規模1.2mの円形墓。出土品なし。
- C 2 - 11号墓 規模径1.8mの円形墓。出土品なし。
- C 2 - 12号墓 規模径0.8mの円形墓。陶器皿磁器片出土。
- C 2 - 13号墓 規模推定径1m、円形墓。破壊。
- C 2 - 14号墓 規模径0.8m円形墓。破壊。
- C 2 - 15号墓 規模径1m円形墓。破壊。
- C 2 - 16号墓 規模径1m円形墓。破壊。
- C 3 - 1号墓 規模長径2m×1mの長楕円形、壇丘中に焼土、かわらけ片出土。
- C 3 - 2号墓 規模2.2m×1.6mの長楕円形盛土中に焼土。かわらけ出土。
- C 3 - 3号墓 規模1.8m×1.2mの長楕円形墓と推定される。破壊。
- C 3 - 4号墓 規模径1.5m前後の円形墓が二基接続している。現代墓で破壊されている。4号・5号墓を呼称している。
- C 3 - 5号墓 同 上
- C 3 - 6号墓 規模径1.4mの円形墓。現代墓で破壊されている。
- C 3 - 7号墓 規模径1.7m円形墓。墓丘盛土を約0.25m掘り下され地点で、人骨片、かわらけ、陶器片、土壤内より銅鏡12枚出土。盛土下に南北1.2m×東西0.6m深さ0.3mの土壤があり、壁面は焼け、内部は木炭、焼土、人骨片が埋っている。
- C 3 - 8号墓 破壊。
- C 3 - 9号墓 破壊。
- C 3 - 10号墓 破壊。
- C 3 - 11号墓 破壊。
- C 4 - 1号墓 規模径4m前後の大形の円形墓と推定、破壊が激しい。

D 2 - 1号墓	破壊。
D 2 - 2号墓	規模径1.2mの円形墓。墓丘裾部より脛骨器破片が出土している。
D 2 - 3号墓	規模長辺2.8m×短辺2.4mの方形墓、盛土中に焼土ブロック、人骨、かわらけが出土。
D 2 - 4号墓	破壊。
D 2 - 5号墓	破壊。
D 2 - 6号墓	破壊。

B 群

Z 4 - 1号墓	規模4.2×5.25m、高さ1mの方形墓、墓丘盛土下に地山を掘りこんだ土壙があり、焼土、木炭片、人骨片が埋っていた。銅鏡（永楽通宝）1枚、小皿、小壺、磁器片、かわらけ（頭骨片が納められていた）
Z 4 - 2号墓	規模4.2×4.6m高さ1m方形墓、墓丘盛土内に焼土、人骨、木炭片が散在している。墓丘下に地山を掘り込んだ土壙あり。
Z 5 - 1号墓	規模1.8×1.8m前後の方形墓。破壊。銅鏡（寛永通宝1）
Z 5 - 2号墓	規模3.7×3.3m前後の方形墓、墓丘中央部に盛土の陥没あり、その下層に地山を掘込んだ土壙を検出、上端径1.4m下端0.8m、深さ1m底部0.2mほど暗褐色土が堆積、その上に棺材破片、銅鏡12枚（寛永通宝6、永楽通宝1、不明5）銅金具、鉄製品、黄瀬戸、かわらけ出土。土葬墓。
Z 5 - 3号墓	上円下方墓。隅溝あり、下方部規模基部1辺4m上端3.1mの台形、上円部基底径2.5m、高さ0.6m。円形土壙、上端径0.9m径0.55m、深さ0.7m、上円部底部より焼土、人骨、銅製品が発見。土壙内より、棺材、金銀製品、銅鏡、骨片、筒、石英片(3点)が出土。盛土中よりかわらけ、五輪塔出土。
Z 5 - 4号墓	規模径3m前後、墓丘は削られている。盛土下に円形土壙、銅鏡（寛永通宝1、釘、木片、かわらけ、人骨片）。
Z 5 - 5号墓	墓丘盛土削られている、破壊。地山を長方形に掘りこんだ土壙、焼土、木炭、鉄製品出土。
Z 6 - 1号墓	規模長径3×短径2.2m高さ0.65mの格円形墓、墓丘下に巾1.6×1m深さ0.71mの土壙。鐵釘4、小壺（中に筒納められている）図版7の2。銅鏡（開通元宝1、永楽通宝1、熙寧元宝1、不明9）
Z 6 - 2号墓	規模径1.6m前後の円形墓、盛土下に地山を掘り込んだ土壙、壁面焼土、人骨、木炭が埋っていた。
Z 6 - 3号墓	破壊された後よりかわらけ片採集。

Z 6 - 4号墓	規模1.4m×1.4m前後の方形墓。破壊された墓丘よりかわらけ片採集。
Z 6 - 5号墓	規模1.2×1.2m、高さ0.35mの方形墓。盛土中央に木炭、人骨、頭骨片、かわらけ片が出土。
Z 6 - 6号墓	規模1m×1m、高さ0.3mの方形墓。盛土中より木炭片、人骨、かわらけ片が出土。
Z 6 - 7号墓	規模一辺4.2mの方形墓。墓丘最下層に巾0.5m前後の黄褐色土が橢円形状に積まれ堆状を呈している。表土下0.4mで磁器器、骨片、かわらけが出土している。
Z 6 - 8号墓	規模1.2mの円形墓。墓丘下に巾0.6×0.95mの土壤、焼土、骨片木炭、墓丘中よりも人骨片出土。かわらけ片が出土。
Z 6 - 9号墓	規模1.2m前後の円形墓と推定破壊されている。
Z 6 - 10号墓	規模一辺1.6m前後の方形墓。旧表土層直上より磁器片、陶器片、骨片が出土。さらに墓丘東隅に地山を掘りこんだ巾0.9深さ0.5mの溝がめぐり、溝中より径0.7m深さ0.1の土壇が発見された。土壇底部は礎床となり、鉄釘10数本、かわらけ片出土。土壇内に焼土、木炭、人骨片がつまっていた。
A 5 - 1号墓	規模一辺4mの方形墓。墓丘中央部に1.3×1.2mの土壤があり黄褐色枯土層が陥ちこんでいる。この土壤内より、人骨、木片(棺材)、銅錢(寛永通宝ほか18枚)、人歯、かわらけ片が出土している。木棺直葬である。さらに墓丘の下に旧地表より巾0.57m×0.96mの長方形の土壤が掘り込まれている。土壤壁面は焼けている。墓丘築造前の遺構。墓丘下の旧地表より巾0.57×0.96m、0.3×1mの長方形の浅い土壇跡面焼土。
A 5 - 2号墓	規模3.9m×3.8mの方形墓。墓丘中央に土壤。土壤内より銅錢18枚、絵銭1枚、かわらけ、鉄釘片が出土している。土葬墓。
A 5 - 3号墓	規模径1.8m前後の円形墓。破壊。
A 6 - 1号墓	近・現代墓が重複しているため破壊されている。(以下破壊と略す)
A 6 - 2号墓	破壊。
B 5 - 1号墓	規模1.6m前後の円形墓。破壊。
B 6 - 1号墓	規模2.8m前後、高さ0.82mの円形墓。墓丘中央部より三耳磁器器ほか。
B 6 - 2号墓	現代墓重複。破壊。
B 6 - 3号墓	規模1m前後の円形墓。破壊。
B 6 - 4号墓	規模一辺1.2m前後の方形墓。破壊。
B 6 - 5号墓	規模径1.2m前後の円形墓。破壊。
B 6 - 6号墓	規模径1.2mの円形墓。破壊。
B 6 - 7号墓	規模径1.6m円形墓。墓丘には遺構なし。墓丘裾五輪塔、かわらけ出土。
B 6 - 8号墓	規模1.4mの円形墓。墓丘中には埋葬遺構なし。人骨、法匯印塔笠出土。

B 6 - 9号墓	破壊。
B 6 - 10号墓	規模一辺1.8m前後の方形墓。破壊。
B 6 - 11号墓	規模一辺2 m前後の方形墓。墓丘中より蟲骨器片、かわらけ出土。
B 7 - 1号墓	規模径1.4m前後の円形墓。破壊。
B 7 - 2号墓	規模径1.2mの円形墓。破壊。
B 7 - 3号墓	規模径1.8mの円形墓。破壊。
B 7 - 4号墓	規模径1.8mの円形墓。破壊。
B 7 - 5号墓	規模径1.4mの円形墓。破壊。
C 5 - 1号墓	規模径1.2mの円形墓。破壊。
C 5 - 2号墓	規模一辺2.2m前後の方形墓。破壊。
C 6 - 1号墓	規模一辺1 m前後的小形方形墓。破壊。
C 6 - 2号墓	規模4.8m×1.6mの長方形墓。破壊。
C 6 - 3号墓	規模2.8m×1.6m長方形墓。破壊。
C 6 - 4号墓	規模3.6m×1.8mの長方形墓。破壊。
C 7 - 1号墓	規模長さ6 m×巾2.2 m前後の不整形な墓丘。人骨、蟲骨器片、かわらけ片が残存している墓丘盛土中より発見。破壊。
C 7 - 2号墓	規模一辺1.4m前後の方形墓。破壊。
C 7 - 3号墓	規模径1.4m前後の円形墓。破壊。

C 群

G 5 - 1号墓	規模推定一辺2×2 mの方形墓と3×3 m前後の方形墓が接続して築造されている。 破壊。
G 6 - 1号墓	規模一辺2 m前後の方形墓。破壊。
G 6 - 2号墓	規模一辺2 m前後の方形墓。破壊。
G 6 - 3号墓	規模一辺2.3m前後の方形墓。破壊。
H 5 - 1号墓	規模一辺1.2m前後の方形墓。破壊。
H 5 - 2号墓	規模一辺1.2m前後の方形墓。破壊。
H 5 - 3号墓	規模一辺2×2 m前後の方形墓。破壊。
H 6 - 1号墓	規模一辺2.2×3 m前後の方形墓。破壊。
H 6 - 2号墓	規模一辺0.8×1 m前後の方形墓。破壊。
H 6 - 4号墓	規模2.6×1.6m前後の長方墓。近・現代墓と重複しているため破壊されている。（以下破壊と略す）

H 6 - 5号墓	規模一辺1.2m前後の方形墓。破壊。
H 6 - 6号墓	規模一辺0.8mの小形方形墓。破壊。
H 6 - 7号墓	規模一辺0.8mの小形方形墓。破壊。
H 6 - 8号墓	規模一辺0.8mの小形方形墓。破壊。
H 6 - 9号墓	規模一辺1mの小形方形墓。破壊。
H 6 - 10号墓	規模一辺0.8mの小形方形墓。破壊。
H 7 - 1号墓	規模巾2m×長さ10m前後の墓丘をもつが方形墓の連続したものか、近代墓の墓丘が築かれたものと推定。破壊。
H 7 - 2号墓	規模3.4m前後の方形墓であったと推定されるが西墓丘は削平されている。破壊。
I 7 - 1号墓	規模長さ3m×巾1.4m前後の長方形を遺存しているが、破壊。
I 7 - 2号墓	規模一辺1.4m前後の方形墓。破壊。
I 7 - 3号墓	規模一辺1.6mの方形墓。破壊。
I 7 - 4号墓	規模長さ4m×巾2m前後の不整形。墓丘の重複が認められる。破壊。
I 7 - 5号墓	規模一辺1.6m前後の方形墓。破壊。
I 7 - 6号墓	規模一辺1.5mの方形墓。破壊。
I 7 - 7号墓	規模一辺1.4mの方形墓。破壊。
I 7 - 8号墓	規模一辺1.2mの方形墓。破壊。
I 7 - 9号墓	規模一辺1.8mの方形墓。破壊。

D 群

I 4 - 1号墓	規模一辺5.4m前後の方形墓。大原墓中でも最大級であるが現代墓と重複しているため破壊。(以下破壊と略す)
J 3 - 1号墓	規模一辺4.8×3.6mの長方形に近い方形墓。
J 3 - 2号墓	規模一辺3m前後の方形墓。破壊。
J 3 - 3号墓	規模一辺3mの方形墓。破壊。
J 3 - 4号墓	規模3.8m×2.6m前後の長方形墓。破壊。
J 4 - 1号墓	規模一辺1m前後の方形墓。破壊。
J 4 - 2号墓	規模一辺1.8m。
K 3 - 1号墓	規模一辺2.6m前後の方形墓。墓丘中にかわらけ二箇体を合せて人骨を埋納している。
K 4 - 1号墓	規模一辺4.2m前後の方形墓。最も大形に属するが近・現代墓と重複し破壊されている。
K 4 - 2号墓	規模一辺1.2mの小形方形墓。破壊。
K 4 - 3号墓	規模長径2.9m×短径2.5m前後の橢円形墓。埋葬施設は特に検出されなかった。一石

五輪塔、五輪塔、宝應印塔などの石造品を墓丘に積み重ねている。

- K 4 - 4号墓 規模径2.1m前後の円形墓。旧表土直上にこぶし大の礫床、盛土約0.3m前後の低い墓丘が特徴的である。
- K 4 - 5号墓 規模径1mの小形円形墓。破壊。
- K 4 - 6号墓 規模径1mの小形円形墓。破壊。
- K 4 - 7号墓 規模一辺0.8m前後の方形墓。破壊。
- K 4 - 8号墓 規模長さ3.2×1.4mの長方形墓。いくつかの墓の連続したもの。破壊。
- K 4 - 9号墓 規模径1m前後の円形墓。破壊。
- K 4 - 10号墓 規模一辺1m前後の方形墓。破壊。
- K 4 - 11号墓 規模1辺1mの小形方形墓。破壊。
- K 4 - 12号墓 規模長さ4.6×1.6mの長方形墓。破壊。
- K 4 - 13号墓 規模一辺1.2m前後の方形墓。盛土中に入骨片出土。かわらけ3(手づくね1)、墓丘より蟲骨器片採集。
- K 4 - 14号墓 規模径1.2m前後の円形墓。かわらけ1、かわらけ片。
- K 4 - 15号墓 規模径1.4mの円形墓。破壊。
- K 4 - 16号墓 規模一辺1.4mの方形墓。破壊。
- K 4 - 17号墓 規模一辺1mの方形墓。破壊。
- K 4 - 18号墓 規模一辺1mの小形方形墓。破壊。
- K 5 - 1号墓 規模径2mの円形墓。破壊。
- K 5 - 2号墓 規模一辺2mの方形墓。破壊。
- K 5 - 3号墓 規模径1mの円形墓。破壊。
- K 5 - 4号墓 規模径1.2mの円形墓。破壊。
- K 5 - 6号墓 規模一辺1.6m前後の方形墓。破壊。
- K 5 - 7号墓 規模一辺1.4mの方形墓。破壊。墓丘表面より五輪塔、宝應印塔部分採集。
- K 5 - 8号墓 規模径1.4m前後の円形墓。破壊。
- K 5 - 9号墓 規模径1.5m前後の円形墓。破壊。
- K 5 - 10号墓 規模径1.4mの円形墓。破壊。
- K 6 - 1号墓 規模径1.5mの円形墓。破壊。
- K 6 - 2号墓 規模径1.5mの円形墓。破壊。
- K 7 - 1号墓 一辺2m前後の方形墓。
- K 7 - 2号墓 規模一辺3mの方形墓。墓丘盛土中よりかわらけ、人骨。
- K 7 - 3号墓 規模一辺1.2mの小形方形墓。破壊。墓丘より銅錢採集。

K 8 - 1号墓	規模径1.2m前後の円形墓。墓丘中より細長鉢壺（歯埋納）、蓋付染付茶碗（人骨埋納）。図1811、図版7.7。
L 4 - 1号墓	規模一辺3.7m前後の方形墓。破壊。
L 4 - 2号墓	規模2.4×1.2m前後の長方形の墓丘が認められる。破壊。
L 4 - 3号墓	規模一辺1.2m前後の方形墓。破壊。
L 4 - 4号墓	規模一辺1.2m前後の小方形墓。破壊。
L 4 - 5号墓	規模径1m前後の円形墓。破壊。
L 4 - 6号墓	規模一辺1m前後の方形墓。破壊。
L 4 - 7号墓	規模一辺1mの小形方形墓。破壊。
L 4 - 8号墓	規模2×0.8m前後の長方形の墓丘残存。破壊。
L 4 - 9号墓	規模一辺1m前後の方形墓の南半部を残存。破壊。
L 5 - 1号墓	規模径1.6m前後の円形墓。破壊。
L 5 - 2号墓	規模一辺1.5m前後の方形墓。高さ0.65mの盛土の下に火葬した土塙あり。
L 5 - 3号墓	規模2.2m×1mの長方形墓。破壊。
L 5 - 4号墓	規模径0.8mの小形円形墓。破壊。
L 5 - 5号墓	規模一辺1mの小形方形墓。破壊。
L 5 - 6号墓	規模一辺1mの小形方形墓。破壊。
L 5 - 7号墓	規模一辺1mの小形墓。破壊。
L 5 - 8号墓	規模径1.4mの円形墓。破壊。
L 5 - 9号墓	規模一辺1.2mの方形墓。破壊。
L 5 - 10号墓	規模径1mの円形墓。破壊。
L 5 - 11号墓	規模一辺1.2mの方形墓が12号と接続して築造されたもの。破壊。
L 5 - 12号墓	規模一辺1.2mの方形墓。11号と接続。破壊。
L 5 - 13号墓	規模一辺1.2mの方形墓。破壊。
L 5 - 14号墓	規模径1.2m前後の円形墓。破壊。
L 5 - 15号墓	規模一辺1m前後の小形方形墓が16号と接続して築造。破壊。
L 5 - 16号墓	規模一辺1mの小形方形墓。破壊。
L 5 - 17号墓	規模一辺2×1.4m前後の長方形墓。破壊。
L 6 - 1号墓	規模3×2mの長方形墓。破壊。
L 6 - 2号墓	規模径1.6m前後の円形墓。破壊。
L 6 - 3号墓	規模一辺1m前後の方形墓。近・現代墓と重複し墓地移転で破壊。（以下破壊と略す）
L 6 - 4号墓	規模一辺1mの小形方形墓。破壊。

L 6 - 5 号墓	規模一辺1.8mの小形方形墓。破壊。
L 7 - 1 号墓	規模一辺1.6mの小形方形墓。破壊。
L 7 - 2 号墓	規模一辺1.6mの小形方形墓。破壊。
L 7 - 3 号墓	規模2×1.2m前後の長方形墓。破壊。
L 8 - 1 号墓	規模一辺1.4m前後の方形墓。破壊。
L 8 - 2 号墓	規模2.4×1.4m前後の長方形墓。破壊。
L 8 - 3 号墓	規模一辺1.4m前後の方形墓。破壊。
M 3 - 1 号墓	規模一辺3.3mの方形墓。破壊。
M 4 - 1 号墓	破壊。墓丘の一部残存。
M 4 - 2 号墓	規模一辺1.6mの方形墓。破壊。
M 4 - 3 号墓	規模径1m前後の小形な円形墓。破壊。
M 5 - 1 号墓	規模一辺2.4×1.8m前後の方形墓。破壊。
M 5 - 2 号墓	規模一辺2mの方形墓。破壊。
M 5 - 3 号墓	規模一辺2.2m前後の方形墓と推定。墓丘東半部は道により破壊。
M 5 - 4 号墓	規模一辺1.2m前後の小形方形墓。破壊。
M 5 - 5 号墓	規模一辺1m前後の小形方形墓。破壊。
M 5 - 6 号墓	規模一辺1m前後の小形方形墓。破壊。
M 5 - 7 号墓	規模径1.8m前後の円形墓。破壊。
M 5 - 8 号墓	規模一辺1m前後の小形方形墓。破壊。
M 5 - 9 号墓	規模一辺1mの小形方形墓。破壊。
M 5 - 10 号墓	規模一辺1mの小形方形墓。破壊。
M 6 - 1 号墓	規模3.2×2m前後の方方形墓。破壊。
M 6 - 2 号墓	規模一辺1.4mの方形墓。破壊。
M 6 - 3 号墓	規模一辺2.8m前後の方形墓。破壊。
M 6 - 4 号墓	規模3.4×2m前後の長方形墓。破壊。
M 6 - 5 号墓	規模一辺1m前後の小形方形墓。破壊。
M 6 - 6 号墓	規模2.2×1.2m前後の長方形墓。破壊。
M 6 - 7 号墓	規模3m×2mの長方形墓。破壊。
M 6 - 8 号墓	規模径1m前後の円形墓。破壊。
M 7 - 1 号墓	規模一辺4m前後の方形墓。破壊。
M 7 - 2 号墓	規模一辺2mの方形墓。破壊。
M 7 - 3 号墓	規模一辺3mの方形墓。破壊。

M 7 - 4号墓	規模一辺1m。小形の方形墓。破壊。
M 7 - 5号墓	規模一辺1mの小形方形墓。破壊。
M 7 - 6号墓	規模一辺1mの小形方形墓。破壊。
M 7 - 7号墓	規模一辺1mの小形方形墓。破壊。
M 7 - 8号墓	規模一辺1.2mの小形方形墓。破壊。
M 7 - 9号墓	規模一辺1mの小方形墓。破壊。
M 7 - 10号墓	規模一辺1.2mの小方形墓。破壊。
M 7 - 11号墓	規模一辺1.2mの小方形墓。破壊。
M 7 - 12号墓	規模一辺1mの小形方形墓。破壊。
M 7 - 13号墓	規模長さ5m巾2m前後の長方形に東に接して巾2、長さ2mほどの方形墓が接続した不規格な墓丘。破壊。
M 8 - 1号墓	規模一辺2m前後の方形墓。墓丘よりかわらけ出土。現・近代墓と重複し破壊。(以下破壊と略す)
M 8 - 2号墓	規模一辺1.2mの小方形墓。破壊。
M 8 - 3号墓	規模一辺1m前後の小形方形墓。破壊。
M 8 - 4号墓	規模一辺1.4m前後の方形墓。破壊。
M 8 - 5号墓	規模一辺1.6m前後の方形墓。墓丘残存部分より人骨出土。破壊。
M 8 - 6号墓	規模一辺1m前後の小形方形墓。破壊。
M 8 - 7号墓	規模一辺2mの方形墓。破壊。
M 8 - 8号墓	規模一辺長さ3m×巾1.4m前後の長方形墓。破壊。
M 8 - 9号墓	規模一辺1m前後の小形な方形墓。破壊。
M 8 - 10号墓	規模一辺3m前後の方形墓。破壊。
M 8 - 11号墓	規模一辺1m前後の小形な方形墓。破壊。
M 8 - 12号墓	規模一辺1mの小方形墓。破壊。
N 6 - 1号墓	規模一辺3.4mの方形墓。南側墓丘道路で削られている。破壊。
N 6 - 2号墓	規模一辺0.6mの小形な方形墓。破壊。
N 6 - 3号墓	規模一辺1mの小形方形墓。破壊。
N 7 - 1号墓	規模径3.2m前後の円形墓。墓丘東半部は削平されている。破壊。
N 7 - 2号墓	規模長さ3m×巾2mの長方形の墓丘を残存している。破壊。
N 7 - 3号墓	規模一辺1m前後の小形な墓丘をもつ方形墓。破壊。
N 7 - 4号墓	規模一辺1mの小方形墓。破壊。
N 7 - 5号墓	規模一辺1m前後の小方形墓。破壊。

N 8 - 1号墓	規模1辺1.4mの小形方形墓。破壊。
N 8 - 2号墓	規模一辺1mの小形方形墓。破壊。
N 8 - 3号墓	規模一辺1mの小形方形墓。破壊。
N 8 - 4号墓	規模一辺1mの小形方形墓。破壊。
N 8 - 5号墓	規模一辺1mの小形方形墓。墓丘上に数個の礎が不規則に並んでいた。破壊。
N 8 - 6号墓	規模一辺1mの小形方形墓。破壊。
N 8 - 7号墓	規模長さ2.8m×1.8m前後の長方形墓。破壊。
N 8 - 8号墓	規模一辺1m前後の小形方形墓。破壊。
N 8 - 9号墓	規模一辺1mの小形方形墓。破壊。
N 8 - 10号墓	規模一辺1mの小形方形墓。破壊。
N 8 - 11号墓	規模一辺1mの小形方形墓。破壊。
N 8 - 12号墓	規模一辺1mの小形方形墓。破壊。

E 群

F12 - 1号墓	規模一辺1.4m×1mの長方形墓。破壊。
F12 - 2号墓	規模1.4×1mの長方形墓。破壊。
F13 - 1号墓	規模2.6×1.8mの長方形墓。破壊。
F13 - 2号墓	規模一辺1m前的小形方形墓。破壊。
G12 - 1号墓	規模一辺4mの方形墓。破壊。
G13 - 1号墓	規模2.6×1.8mの長方形墓。破壊。
G15 - 1号墓	規模一辺3.4mの方形墓。東半墓丘は道路により削られている。破壊。
F14 - 1号墓	墓丘一部残存。破壊。
H14 - 1号墓	規模一辺3m前後の方形墓。破壊。
H14 - 2号墓	規模一辺2mの方形墓。破壊。
H14 - 3号墓	規模一辺3mの方形墓。破壊。
H14 - 4号墓	規模、長さ5m×3.4mの墓丘を5号・6号共有している。現代墓・近代墓により破壊（以下破壊と略す）
H14 - 5号墓	
H14 - 6号墓	
H14 - 7号墓	規模径1m前後の小形円形墓。破壊。
H18 - 1号墓	丘陵斜面利用、墓丘削られているが残存部より4.2mの方形墓と推定される。残存墓丘盛土0.2m、小甕で墓丘を覆っている。墓丘より麻骨器2点（中世陶器）出土。その他に土壙1ヶ所。所見として、墓丘に礎を葺くのが本墳墓群では中世墓である。

I 11-1号墓	規模一辺3.8m前後の大方形の方形墓。破壊。
I 12-1号墓	規模一辺5mの大形方形墓。破壊。
I 12-2号墓	規模一辺1.2m前後の小形方形墓。破壊。
I 13-1号墓	規模一辺4.8mの大形方形墓。破壊。
I 14-1号墓	規模一辺4mの方形墓。墓丘の高さ0.9m墓丘には、人骨を小甕で開いた小規模な埋葬施設が2ヶ所、その東に接して、0.25×0.2m前後の甕で小石室を作った遺構より山茶楓片が出土している。
J 13-1号墓	規模一辺5mの大形方形墓。破壊。
J 13-2号墓	規模一辺3mの方形墓。破壊。
J 13-3号墓	規模一辺3mの方形墓。破壊。
J 14-1号墓	規模長さ6.8m巾大4.4巾小2.4mと不規模な梯形の墓丘を残している。破壊。
J 14-2号墓	規模4.4×3.6mの長方形の大形墓。破壊。
J 14-3号墓	規模5m×4mの長方形の大形墓。破壊。
J 14-4号墓	規模一辺3.6m前後の方形墓南半部破壊。墓丘下0.25mで0.3m前後の石床状の遺構、墓丘下に土壙あり。
J 14-5号墓	破壊。
J 15-1号墓	破壊。
J 15-2号墓	破壊。
J 17-1号墓	破壊。
K 13-1号墓	規模4×2.6mの長方形の墓丘。高さ0.34mと低い。甕の葬石あり。中央に藏骨器が埋納されている。墓丘の下地上直上に2.4×2.4の方形に小甕の区画が認められた。
K 13-2号経塚	規模、一辺2.1×2.3m、高さ0.55m三方に周塙あり。径0.03×0.05m前後の写経石を混えた平遍な小甕を台形に積みあげている。一面に経文一字を墨書き、うら面に梵字を書いている。確認31点。
K 14-1号墓	規模一辺3m前後の大方形墓。破壊。
K 14-2号墓	規模一辺2.6mの大方形墓。破壊。
K 15-1号墓	規模4.8m×3mの長方形墓。破壊。
K 15-2号墓	規模5m×2.8の長方形墓。破壊。
K 15-3号墓	規模一辺3mの大方形墓。土葬と推定される土壙残存。破壊。
K 15-4号墓	規模5m×3mの長方形墓。墓丘に葬石残存。破壊。
K 15-5号墓	規模一辺2.4mの大方形墓。破壊。
K 15-6号墓	規模一辺2.8mの大方形墓。破壊。

- K16-1号墓 規模一辺3mの方形墓。破壊。
- K16-2号墓 規模4×2.6mの長方形墓。破壊。
- K16-3号墓 規模5.4×3.4の大形の長方形墓。破壊。
- K17-1号墓 規模一辺2mの方形墓。破壊。
- K17-2号墓 規模一辺2mの方形墓。破壊。
- K17-3号墓 規模径1.4m前後の円形墓。破壊。
- L13-1号墓 規模径1.5mの円形墓。蔵骨器破片採集。破壊。
- L14-1号墓 規模一辺2mの方形墓。破壊。
- L14-2号墓 規模一辺2mの方形墓。破壊。
- L15-1号墓 規模径1m前後的小形円形墓。蔵骨器片採集。近・現代墓と重複のため破壊。(以下破壊と略す)
- L15-2号墓 規模長径3m短径1.9m墓丘の高さ0.75mの横円形に近い外観を有する。墓丘に徑0.1m前後的小礫の葺石がある。墓丘中央部より蔵骨器(第17図・1)が出土。
- L15-3号墓 規模一辺1.4m前後の方形墓。破壊。
- L15-4号墓 規模一辺2.6mの方形墓。墳丘に小礫の葺石。常滑陶器破片出土(蔵骨器)。
- L15-5号墓 規模一辺2mの方形墓。破壊。
- L15-6号墓 規模一辺1.5mの方形墓。小礫の葺石、蔵骨器破片出土。かわらけ出土。
- L15-7号墓 規模一辺2.8mの方形墓。墓丘頂部葺石。かわらけ出土。
- L16-1号墓 規模一辺5mの大形方形墓。特別な埋葬施設なし。
- L16-2号墓 規模一辺3mの方形墓。土葬と推定される。土壙が発見される。
- L16-3号墓 規模一辺3mの方形墓。土葬と推定される。土壙が認められる。
- L16-4号墓 規模一辺4.7mの大方形墓。土壙が認められる。葺石あり。
- L16-5号墓 大半の墓丘を削られている。破壊。
- L16-6号墓 規模一辺1.4m前後の小方形墓。破壊。
- L16-7号墓 規模一辺1.5mの小方形墓。破壊。
- L16-8号墓 規模径1m前後の小円形墓。破壊。
- L16-9号墓 規模径1mの小円形墓。破壊。
- L16-10号墓 規模径1mの小円形墓。
- M14-1号墓 規模長径2.5m×短径1.7m横円形の0.15mと低い墓丘。葺石、中央部に蔵骨器(底を抜き五輪地部を置いている)、銅錢(嘉祐通宝)1枚出土。
- M14-2号墓 規模一辺3m前後の方形墓。破壊。
- M15-1号墓 規模一辺4mの方形墓。墓丘高さ1m、頂部に不整形な石圓遺構があり、人骨片に山

茶碗をふせた形で埋納されていた。その下層に土壌があり、人骨細片が混在している。
(第17図・5)

- M15-2号墓 規模一辺3m前後の方形墓。墓丘より蓮弁文鏡破片1点採集。(第4図・1)
- M16-1号墓 規模一辺2m前後の方形墓土葬と推定される土壌あり。
- M16-2号墓 規模4×3mの方形墓。藏骨器(口縁部)採集。
- M16-3号墓 規模一辺3mの方形墓。破壊。
- M16-4号墓 規模5×4mの長方形墓。礎で方形にめぐらし墓域を画している。
- M17-1号墓 規模一辺2mの方形墓。葺石が認められるが、遺構検出されない。
- M17-2号墓 規模一辺2mの小方形墓。土葬墓。
- M17-3号墓 規模一辺2mの小方形墓。土葬墓。
- M17-4号墓 規模一辺2.4mの方形墓。破壊。
- M17-5号墓 規模一辺1.8mの方形墓。破壊。
- M17-6号墓 規模径1m小円形墓。破壊。
- N15-1号墓 規模一辺3m前後の方形墓。巾0.3m前後の礎帯が方形にめぐらされている。墓丘中心部に土壌あり。墓丘中より香鉢、鉄片、銅錢(寛永通宝)1枚出土。
- N16-1号墓 規模一辺2mの方形墓。葺石あり。大形礎で方形を画している。
- N16-1-1号墓 規模一辺1.6mの方形墓。破壊。
- N16-2号墓 規模一辺1.7mの方形墓。破壊。藏骨器片採取された。
- N16-3号墓 規模3×2mの長方形墓。破壊。
- N16-4号墓 規模一辺2mの方形墓。破壊。
- N16-5号墓 規模一辺2mの方形墓。破壊。
- N17-1号墓 規模3.4×3.1m方形墓。葺石あり。藏骨器、埋葬施設とともに発見されなかった。
- N17-2号墓 規模一辺3mの方形墓。墓丘高さ0.35m、一辺3mの周囲をめぐらす、葺石(0.10~0.15m)藏骨器3点東西に並んで埋置されていた。特別な埋葬施設は認められない。
(第16図5・6・7)
- N17-3号墓 規模一辺1.4m前後の規模を有する方形墓。破壊。
- N17-4号墓 規模一辺2.7mの方形墓。1.3mの方形に礎を敷きならべその上に藏骨器を埋置している。
- N17-5号墓 規模一辺2.5mの方形墓。破壊。
- N17-6号墓 規模一辺2.6mの方形墓。破壊。

西地区

A群は、南北方向は、A～D区までの40m、東西は1～4区までの40mの地域に所在する总数50基を数える。

これらの墳墓は外観上、盛土された墓丘するものが大多数である。このうち、大半は墳墓上に後世に近・現代墓が重複して築造され、それらの近・現代墓が墓地移転によって破壊されていたので、本調査の対象としたのは、B 1～1号墓からD 3～2号墓までの24基である。

墓丘の外観は円形又は円形2基が接続して築造されたため複数円形を呈するものを含め円形墓は38基（全体の76%を占める）である。円形墓の規模は、墓底径1.5mから2m前後を測る。墓丘の高さは最も高い頂部でも1m以下の盛土が認められる。いずれも小規模なものが多く、墓丘はいわゆる、土饅頭形をしている。

次に墓丘が方形を呈するものはB 1～2号墓以下6墓である。墓丘の規模はB 1～2号墓のごとく、一辺5m、墓丘高さ1.35mの大形墓とB 2～4号墓のごとく、一辺1.64m前後の中規模なものとが認められる。

さらに、墓地移転で掘り返され、墓丘の形が、方形か円形か判定の困難なもの6基があげられる。

次に発掘した24基の葬法についてみれば、土葬はC 2～1号墓のごとく、盛土中に発見された、1体の人骨と地山に掘り込まれた長方形の埋葬遺構に埋葬されたと推定される例を除きA群における葬法は火葬である。

なおA群を構成する各墳墓についての説明は煩瑣を除けるため第1表に表示し、さらに主要な墳墓については後節で精細に記述する。

B群は、A群と約10mほどへだてた東側に位置し、A区の北に補足したZ区からC区まで南北40m、東西は4～7区までの40mの範囲内に所在している49基より構成されている。

墓丘外観より分類すれば、円形墓は19基で全体の39%を占めている。方形墓は17基、長方形墓5基、さらに上丹下方墓2基を含めて方形墓は49%となる。その他両者いずれとも定めがたい不明6基で12%の比率を占めている。

A群同様の理由で多数の墳墓が破壊されていたため調査対象としたのは17基である。

発掘した24基の墳墓の葬法は、Z 4～1号墓ほか火葬墓24基、Z 5～2号墓ほか4基が土葬墓である。各墳墓については第1表に表示するとおりである。

B群は、A群に比して方形墓が多く、特に日本の墓形としては類例の少ない、上丹下方墓が2基存在していることが注目される。

墓丘の規模は、A 5～2号墓の如く、一辺4mの大形方形墓が3基、次いで一辺3～4m前後の中形に属する方形墓が3基、円形墓はB 6～1号墳の墓底径3mが唯一で、他は墓底径2mに満たない小形墓である。

〔第3図参照〕

C群 C群として分類したグループは、西地区のほぼ中央部に位置する一群である。地域と

しては南北方向では、G～I区までの30m、東西は5～7区までの30mの区域に所在している。この地域は、近代、現代の土葬墓が密集していた地帯で、今回の改築による破壊の最も激しい地域であった。

このうち、近世以前の墳墓と推定されるものは、33基である。

33基のうち、墓丘の外形より分類すれば方形、29基、長方形（方形2基連結）1基すでに、墓形すら確認できないもの3基で本群中には円形の墓丘は全く認められず、すべて方形と推定される。本群は発掘調査を実施していないので、葬法等は不明である。採集される陶磁器片から近世墓と推定される。

D群 D群として括した墳墓群は、西部地区の南端部に位置するものである。

地形的には丘陵平坦部からゆるい南傾斜面に移る転換地点にあたり、南の各村落から大原墓地に通ずる参道に南を区切られている。この道より南は現在は茶畠として耕作されている。

この地区も、C群同様、現代墓の密集地帯で破壊の激しい地域である。本群は南北はJ区～N区までの50m、東西範囲は3区～8区までの50m、全体で約250m²の地域内に大形・小形墓を混えて、総数141基まで確認された。このうち、墓丘の方形をなす方形墓と長方形墓（3基）を含めると群の大半を占める77%にあたる109基、円形墓は20%の28基。その他不明4基で3%の割合で方形墓が主体となっている。

このうち、現存している墓丘の規模は大・小かなりの差異があり、群中最大の規模を有するのは、I4-1号墓で一辺、5mの方形墓で、次いでJ3-1号墓、H4-1号墓の一辺、4m前後である。一辺3mを超える大規模な墳丘を有するものは13期で0.9%にすぎない。他は一辺、1m～2m以下の小形墓であり、特に円形墓には大形墓は見当らない。

本群中、円形墓の最大径はK3-13号墓の基底径2.8mである。

発掘調査を実施したのは10数基である。群の各墳墓については、第1表に表示する。また、本群の特徴を挙げれば、小形墓の密集をとりあげることができる。

D群の調査例10基のうち、K4-13号墓ほか1基の土葬例2基のはかは、火葬である。

東地区

前述の如く、大原墳墓群の中央部から南に伸びる侵蝕谷が始っており、この低地を境にして、東・西両地区に大別できることを記述したが、A群からD群までの4群はいずれも西地区丘陵上に所在し、谷をへだてた東地区的丘陵平坦部に築造されている墓をE群と呼称して記述することにする。

E群は、丘陵の中央部以北に築造されている墳墓の規模や形状は、丘陵南端部に築かれている墳墓との間には大きな相異が認められるが現時点では地域的に区分することは困難であり、一括してE群とする。

E群の所在する地域は南北グリット名ではH区からN区までの70m、東西グリット名では、12区から17区までの50m前後の地域内に所在している。

E群を構成する墳墓の総数は95基であり、全体の83%に相当する78基が方形墓であり、9%の9基が円形墓である。残り8%の8基が墓形不明という構成である。

E群中、丘陵の平坦部に築造されている墳墓群は、D群で大形墓の例としてとりあげた一辺5m前後の方形墓は、I12-1号墓を始め9基、一辺4m前後の方形墓がH14-3号墓以下、17基と大形墓が全体の27%を占め、いずれも方形墓である。

また、一辺2m以下の方形墓、同じく基底径2m以下の小形墓は両者あわせて17基で、群内に占める比率は18%となり、D群に比較すれば、きわめて少ないので特徴的である。また、小形墓の築造されている立地は丘陵縁部に沿っているのが特徴的である。

さらに、各墓については表示するが、K13-1号墓など蔵骨器を出土する例が多く認められる。E群の小形墓はN16-1号墓例の如く、出土品より中世墓と推定される例が多い。

E群95基中、発掘調査を実施したのはN15-1号墓を始め、38基であり、葬法は火葬24例、土葬14例であった〔第1表参照〕。火葬例には、蔵骨器に納骨されて埋葬されている例が多く認められたことは前述のとおりである。

K13-2号墓は、墓丘を構築するのに盛土に代えて扁平な楕円形の河原石を積み墓丘を築いている例が2例ある。

以上、大原墓地内に所在する墳墓群について記述したが、調査の結果、墓丘の形状・構造・埋葬施設・葬法など実に多様多岐に亘り変化に富んでいる。

さらに、築造された年代は中世から近世までかなり長い年月にわたっている。

これらを併せ表現するため、本報告文では中世墓と近世墓に大別し、これらの墳墓の類型から代表的な調査例について記述する。

V. 近世墓

B2-10号墓

本墓は、墓丘頂部で現地表より40cm、基底径290cmの盛土をもった高塚墓で、いわゆる土饅頭のような外観を呈している。

墓丘調査の結果は、第5図 墓丘断面図に示したように、旧地表に茶褐色有機土を盛土したもので、墓丘築造の上で土層の変化は全く認められない。

埋葬施設 墓丘中心部附近で、南北幅100cm、東西幅70cm、深さ40cm前後の表土からの掘り込まれた土壤が発見された。

土壤底部の形状は楕円形の南端を左に曲げたような不整形を呈し規模は、最長部で80cm、巾60cmを測り、底部は平坦でなく深さ15cm前後の湾曲を示している。

南端部に長径10cm前後の円礫が配置されていた。

土壤内よりは、人骨、副葬品は出土していないが、焼土が散在していた。土壤の状態より、墓丘が築かれた後に別な埋葬が行われたことを証している。この土壤を第1土壤と呼称する。

さらに、墓丘の北端部に深さ40cm前後の掘り込みが認められるが、墓丘断面の観察によれば、この小規模な土壙を切って第一・土壙が掘り込んでいるので、この土壙の方が第一土壙より先行するもので、第二次土壙と呼称する。この第二次土壙も人骨、副葬品の出土は認められないが埋葬施設と推定される。

本墓の本来の埋葬施設は、旧表土を形成している、約10cm前後の黒色土層から黄褐色粘土層の地山にいたる深い土壙である。

第三土壙は、墓丘の中心部下にあり、規模は、深さ60cm、長径92cm、短径50cmほどの長方形を呈す土壙である。

土壙底部に少量の骨片と若干の焼土が散在していた。副葬品は、縫針と銅鏡が発見されている。

B 2 - 4号墓 本墓は北西部に所在するA群を形成している一基で、B 2 地区内に所在している。〔第6図参照〕

本墓の規模は、一辺が1.6m前後の方形墓である。墓丘の高さは現地表より約20cmほど盛土された低い墓丘で、周辺には墓域を画すような溝や石門などの外部施設は特に認められない。盛土は褐色土で特に変化は認められない。

墓丘頂部より約43cm掘り下げたところ墓丘西半分より、長さ約10cm前後の木炭片や焼土がブロック状に発見された。これらの木炭片や焼土に混じって焼骨細片が出土している。出土状態の観察から、木炭片や焼土周辺部は火を受けて焼けた痕跡は認められず、二次的に埋置されたものである。埋葬のために特別な施設は設けられていない。

本墓丘の築かれている下に、旧地表から掘りこまれた一辺160cm前後のやや不整な方形を呈す土壙が発見された。土壙の深さは、西端部で45cmほど地山を掘りこんでいる。

この土壙の東端部では、床面をさらに長径100cm、短径68cm前後の楕円形に深さ20cmほど掘り込んでいる。

この楕円形土壙の壁面は強い火を受け酸化した焼土壁となっている。底部には、木炭、焼土が多量に堆積し、この中に人骨片が混在していた。さらに、永樂通宝1枚が焼けて出土している。

この状態から推考すれば、方形の土壙を掘りさらに、土壙の一部を掘り下げ、ここで遺体を荼毘に付した後、火葬骨を集骨した上で埋めもどし方形土壙の床面直上に火葬骨を埋置して、その上に第6図の如く盛土して墓丘を築いている。

荼毘に付した火葬場の上に墓を築く埋葬方法が本墳墓群では近世墓に広く行われている葬法である。

Z 5 - 3号墓 B群に属し大原墳墓群の北端部に位置している。外形は、墓丘下半部は台形を呈し、その上に半球形に盛土した上円下方墓である。現墓丘極部には方形の周溝がめぐっている。墓丘の規模は基底部で一辺4m、上端で一辺3.1mの台形の上に基底径2.5m、高さ0.6

mの上円部が塗かれている。

墓丘の上円部は有機質の褐色土層で盛土されている。下方部は地山を形成している黄褐色粘土層、いわゆる赤土で築造されている。

周溝は地山を一辺4.2m、深さ0.3mのU字形の断面をしたものである。墓丘との関係は、まず平面形の規模を決め周溝を掘り、その地山の赤土を台形に築いているものと推定される。

埋葬施設としては、IH地表から掘り込んでいる円形の土壙が発見された。この土壙は上端で径90cm、土壙の深さ70cm、底部径55cmである。

発掘当時はこの土壙内は土砂の陥ち込みがなく空洞の状態で発見された。

土壙内部には、水が溜っており底部から、棺の木片、金銅製金具、銅鏡、骨片、歯と屍体の一部が屍蠍化して発見された。

こうした発掘時の状態より推考すれば表土層より昔褐色粘土層に至る墓壙を掘り円筒形の棺桶に坐臥屈葬の姿勢で埋葬し、その上に板等によって上壙の蓋をして天井部を造り、その上に粘土質の強い地山の黄褐色粘土で盛土して下方部の墓丘を築いたので、天井部の板や木材が朽ちるまでの間に粘土が締り、天井部が朽ちても土壙内部に土砂が陥没せず、土壙内が空洞化したものと推定される。こうした状態の内で、屍体の脂肪が水中のカルシウムやマグネシウムと結合して石触状になって一部が遺存していたが、発掘して外気にふれたため短時間で消滅してしまった。

上円部底部に近い位置から人骨と銅製品が発見されているが、黒色七層のため埋葬時の土壙の掘り方を検出することは困難であった。

墓丘の築造後の追葬と考えられる。〔第7図参照〕

C 2-1号墓 本墓は大原墳墓群中、西北部に位置するA群に属し、区画はC 2地区内に所在している。この地区は小規模な墓丘を有する近世墓の密集地帯を形成している。

本墓丘の規模は基底径1.6m、高さ30cm前後の低い円形を呈している。〔第8図参照〕

墓丘表土より約34cm前後下層から人骨と銅鏡2枚が出土した。これらの焼骨は埋葬施設は全く認められず盛土中に直葬されていた。

人骨に伴って出土した銅鏡2枚のほかには五輪塔の空・風部が盛土中に混在したが他の部分は全く発見されず一体となっていたものとは考えられない。

墓丘を除去したところで、旧地表より掘りこまれた長さ1.6mの不整形な長方形の土壙が発見された。土壙内部は二段に掘られ、北側の一段目は旧地表下、約30cm、南側はさらに深く、約60cmほどの土壙が掘り込まれていた。土壙内部壁面は焼土となっているため遺体を茶毬に付したものと推定される。

本墓と直接に関るものか否かは明らかでないが、築造を推定すれば、最初に土壙を掘り、そこで遺体を茶毬に付し焼骨を取り上げた後に土壙を埋めもどし、その上に盛土して本墓丘の基部を築き、焼骨と銅鏡を埋葬してさらに上に盛土して築かれたものと考えられる。

K4-3号墓 本墓は西地区の南西に位置するK4区に所在し、D群に属するものである。

墓丘の規模は基部で長径2.9m、短径2.5m前後の横円形を呈し墓丘の高さは30cm前後と低く墓域を明確に定めがたいものである。(第9図参照)

現況で墓丘上に一石五輪塔などの石造物の一部が露出しているのが認められた。

現地表をなす表土層を除去し石造物の検出に努めた結果、第9図平面図に示した如く、石造遺物として一石五輪塔26体、五輪塔の地部が4体、水部1体計互体、宝篋印塔等部4体、九輪部2体、宝珠部1体計7体が発見された。出土状態を観察すれば、これら石造物は全く乱雑に積み重ねられた状態を示している。墓域を画すため南端の部分は径15cm前後のやや火形の礎を並べているか他は石造物を積み重ねている。墓の中心部分は、五輪塔や宝篋印塔などの大形の部分を集め、その周辺に一石五輪塔などを積んでいる。

宝篋印塔、五輪塔とも1体の組合せを形成する部品はなく、これらが、現地点に建てられたいた石造物が崩れ落ちたとは考えられない。

本墓からは埋葬施設も藏骨器も発見されなかった。築造の時期を推考する資料に欠けるが、宝篋印塔・五輪塔が意義を失った時期に大原墳墓地内に散在していた石造物を集め、石材として利用したものと推定される。

本墳墓群中には他に類例をみない特殊例である。

VI. 中世 墳 墓

K13-1号墓 本墓は東地区丘陵南半部の西縁に位置するK13区に存在し分類上E群に属している。

墓丘外観は、一边長が3.6m前後、現墓丘の高さ30cm前後で長方形に近い平面形を呈している。

現墓丘表上層を除いたところで、西半部には径10cm以下の小礎が散在していた。墓丘の中央部で口径20cmを測る甕と考えられる藏骨器の口縁部が発見された。

墓丘構造は、第10図墓丘断面図及び礎群平面図に示したが、築造の順序としてはⅢ地表に長径20cm~30cm前後の大型の礎を一辺2.4m前後の方形に置き並べて墓丘の規模をきめ、その範囲に約15cmほど黄褐色土層を盛土したところで、藏骨器を埋置しその周辺を中心にして径10cm前後の小礎を墓丘全面を3重に重なるほど積み上げている。さらに、この礎層の上に約10cm前後の褐色土層を盛り上げている。

第10図礎群平面図に示した斜線施文の石が基礎石であり、西側ではこの基礎石よりさらに西側に半円形に礎が散在している。これは本墓に伴う礎群とは別のものであり、本墓築造後、隣接して別の墓が作られたものでありK13-1号-1墓と仮称しておきたい。墓丘の外観からは両者を区別するものは全く認められない。後者に伴う出土品は明らかでない。

本墓出土の藏骨器については遺物の項で精細に記述する。

大原墳墓群のなかでは、本墓のように墓丘規模を基礎石で区画している例は特殊であり他に類例をみない。

H18-1号墓 本墓は東地区の北東部に位置するH18区に所在し、丘陵東斜面に接して1基だけ、かけはなれた地点に築造されているが、かつては東斜面にも多くの墳墓が築造されていたものが近世以降の墓が造られていく段階で破壊されていったものであろう。

本墓も現況では盛土の上半部がなく雑草を除いただけで、10cm以下の小礫層が露れ、藏骨器の肩部から上が欠けた状態で、東西に二個ならんで発見された。

前述のように現地表面まで平坦に削平されているため築造時の墓丘の規模、形状は明らかでない。

本墓の構造について第11図断面図によって観察すれば、Ⅲ地表を築造時に深さ約20cm、長さ4.2m四方を掘り下げ、この底部に改めて10~15cm前後の高さに褐色土を盛り、この土層上部に洪積層に含まれている小砂利を選別したものを厚さ5~6cm積み、この上に径5~6cm前後の礫と褐色土を混じて築造されている。

藏骨器の出土状態は第11図断面図に示した西側のものは（1号藏骨器と呼称する）小砂利層直上に埋葬した上で墓丘を築造している。

東側のもの（2号藏骨器と呼称する）は、墓丘が築造された後に小砂利層を切って埋葬のため土塹を掘り込んでいることが明らかである。

1・2号藏骨器の埋葬された前後関係を示している。

なお現存する墓丘の中央部に径50cm前後の土括が地山まで掘られているが出土品は認められなかった。第3の埋葬が行われているか時期は不明である。

歳骨器については、復元が困難である。

L15-2号墓 本墓は東地区丘陵南部のL15区に存在し、群の分類上、E群に属している。墓丘は低く、区画も明確でないが、外形は東西に長軸をもった楕円形を呈している。

規模は長軸径3m、短軸径1.9m、墓丘の高さ0.75m前後である。

墓丘の構造は第12図墓丘断面図に示したごとく、盛土は周辺と同質の黄褐色粘土質の土を使用している。墓丘裾には地山を掘り込んだ痕跡が認められるが、これが、これは本墓を構築する以前に掘られたものである。特に東裾の深い掘込は埋葬用の土塹と考えられる。

同図断面図の第6層がⅢ地表でありその下層は地山と推定される。

墓丘頂部と墓丘裾部に径10cm以下の小礫が散在している。頂部の礫は露出しているが、裾部に散在している小礫の上には約10cm前後の覆土が見られるので、かつては頂部附近に葺かれていた小礫が転落した上に上砂が堆積したものと推定される。

埋葬施設としては、墓丘のほぼ中央部から藏骨器の埋置されているのが発見された。

藏骨器を埋置するための特別の施設は設けられていない。墓丘頂部にごく浅く直接掘り込んで埋葬されていた。

藏骨器については後述するが口縁部まである壺形陶器である。〔第17図・1〕

M14-1号墓 本墓はE群に属し、東地区的丘陵西南端部に位置する斜面への転換地に位置している。〔第13図参照〕

墓丘がきわめて低く、外観からは自然地形との区別がむずかしい程で、現況では僅かにたかまりが認められる。墓丘の形態は卵形で長径2.5m、短径1.7m、高さは0.15m前後である。墓丘盛土は暗褐色土で旧地表との区別はつけがたい。

墓丘表面には疎であるが礫に覆われている。礫の大きさは大きなものは径10cm前後のものから小形のものは径4cm前後のものを混えて粗い葺石状を呈している。

埋葬施設は、墓丘の中央部より寄りに現存部の口径20cmほどの陶器甕が埋葬されている。甕の底部はさく孔され、底部に五輪の台座の立方形の切石が納められていた。さく孔された底部を持つことなどから、この陶器が藏骨器であることは間違いないと推定されるが、しかし人骨は出土していない。

藏骨器を埋置し周辺に盛土し墓丘が完成したところで表面に葺石が施されたものと推定される。

藏骨器については、復元は困難であるが時期は14世紀代と推定される。

本墓からは他に、埋葬施設は発見されずこの藏骨器のみである。出土品も他に発見されていない。

M15-1号墓 本墓は東部地区の南端部に近いM15区に所在している。

形状は比較的よく原形を保ち方形を呈しているが、墓の裾部では盛土の崩れなどで不整形になっている部分も認められる。

墓丘の規模は基底部で一辺4m前後の方形墓である。現墓丘の高さは1mである。

墓丘の盛土は挿図14図に示したごとく、旧地表面に第2層黄褐色土層及び現墓丘表面を形成している褐色粘土層が盛上されている。

墓丘表面には特別の施設は見当らない。

埋葬施設は墓丘頂部に不整形な丸い石圓いが発見された。石圓いに使用されている礫の大きさは大型のもので径10cm、小型のもので径5cm前後である。さらに、石圓いの下層に三角形の土壤が掘されていた。土壤の規模は長さ0.5m、深さ0.5m前後で土壤内部には黒色上がつまつておらず、この土層中に焼骨の細片が散見された。この石圓の西端に行基焼（17図・5）が1点、底部を上にして伏せた状態で出土している。

次に、主体部の埋葬施設以外に墓丘南裾部に径10cm前後の礫が散在し、この附近から山茶椀の破片が数点出土している。この礫群は墓丘を覆う褐色土層中に発見されており墓丘が染造された後に追葬された埋葬施設であるが、山茶椀の破片が頂部で発見された方1埋葬施設より出土した山茶椀と同時期のものであり、南裾の第2埋葬施設とかけはなれた時期のものではない。

さらに、墓丘北側裾部には、現墓丘より掘りこまれている、深さ0.7mほどの土壤が発見され

た、土壙の規模は、上端で約1m底部で0.4m前後である。土壙内部よりは出土品は全く発見できず土壙の時期を推定するのは困難であるが七壙の形状より近世の土壙墓と推定される。

N17-2号墓 本墓の所在する位置は、東地区の東南端で丘陵が、ゆるやかに斜面に移るN17区に築造されている。墓丘の形状は一辺3m前後の方形を呈している。現存の墓丘の高さは東側で現地表より0.7m、西側で0.35mを測るが、これは地形がゆるく東に傾斜している地点に立地しているためである。

墓丘の中央部から藏骨器三個が発見されている。これらの藏骨器は現況では、肩部から口縁部にかけて露出した状態で発見された。

墓丘の構造については第15図墓丘断面図に示したように、築造の段階で、まず一辺3m四方の周溝を掘りめぐらし、この土砂を墓丘底部に積み上げている。周溝の状態は部分的に不整形で西側では、溝巾0.5m、深さ0.2mを測るが、東側では0.4mの深い溝となっている。

墓丘を構築している上層は前述の如く溝を掘った土を積んでいたため、暗褐色の有機質土で特に変化は認め難い。

墓丘頂部は、径10cm～15cm前後の円礫が敷きつめられている。

出土した藏骨器の個々の説明は第4章出土遺物の項で詳述するが、出土状態は第15図平面図に示しているように墓丘中心部に、東西の直線上に三個の陶器壺が接して発見された。

三個並んだ中央のものは四耳壺である。壺の内部には土砂が混入しているが、細かく碎かれた焼骨が埋っていた。〔第16図・5・6・7〕

前述のように発見時には肩部から上が露出しているが、本来、埋葬された時には口縁部まで埋められていたと推定されるので、墓丘が約0.15～0.2m前後流失したものと考えられる。

これら藏骨器は、いずれも墓丘に直に埋められており、埋葬施設は設けられていない。

K13-2号経塚 本遺構は他の埋葬施設と異なり一字一石経を納埋した経塚遺構である。

調査前の状況は、径3～5cm前後の扁平な小礫を積んだ一辺2m前後の積石塚状の低い塚が観察され、本墳墓群中特異な構造をもつた遺構として注目されていた。

所在する位置は東部地区のK13区に区画された地域に存在している。地形的にはK13区は丘陵の西斜面にあたる。

経塚には標識になる石造物の建立などは認められない。

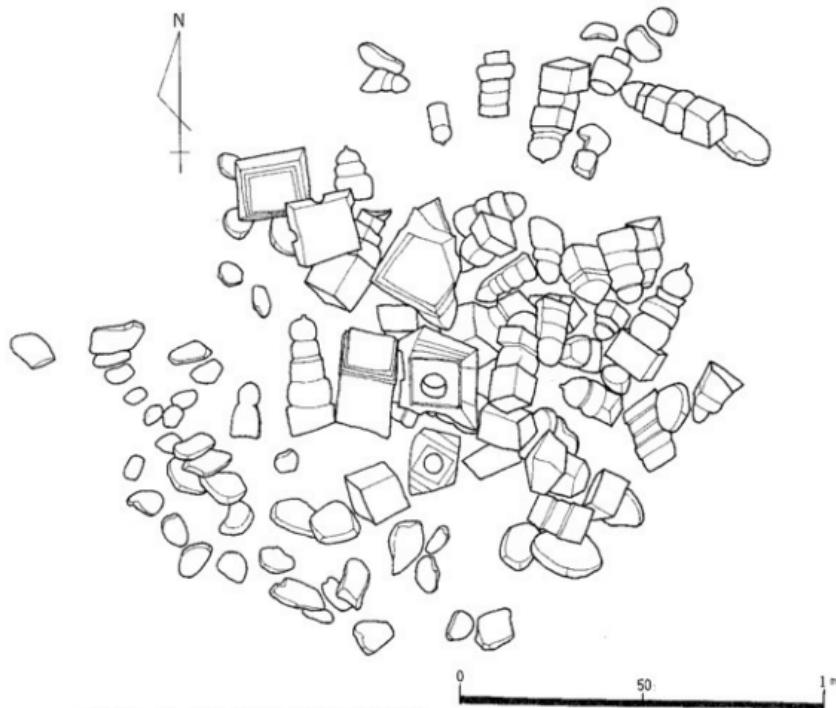
一字経塚の構造は丘陵斜面を一辺2m前後の広さで、東端で地表から深さ55cmほどカットして平坦面を造り、東側壁を除く、三方向については約20cmほどの深さに掘りめぐらしているため、平坦面が基壇状を呈している。この基壇上に扁平な礫を梯形に積み上げているが、この石積の過程で地山壁が残っている東側を除いては外周に厚さ約20cm前後の厚さに黄褐色土を積みながら礫の崩れを防ぎ最終的には全体を被うている。

小礫の積まれている厚さは0.55mにも達し全体の個数は莫大な数にのぼっている。これらの礫は、すべて自然の河原石から扁平な石を選別している。この小礫中に、経文の文字を一字墨書

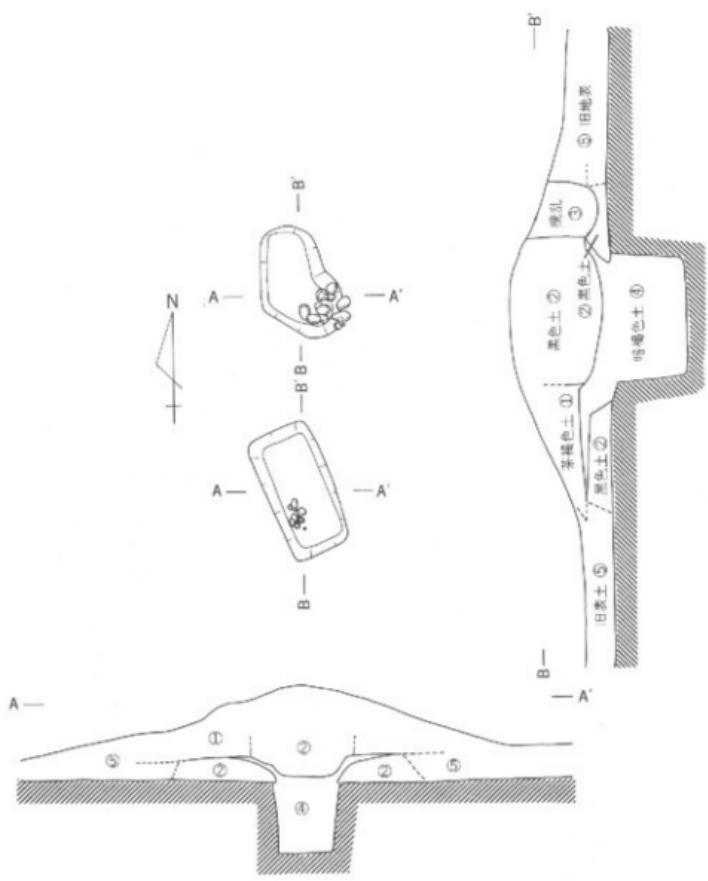
し、その反対面に梵字を書いた経石が31点出土した。なお、これらの経石の出土状態は経石を一ヶ所にまとめて埋納したものではなく、全体の礎の中に混在していた。

そのためすべての礎について墨書の有無を確認した。経石については別に、遺物の項で記述する。

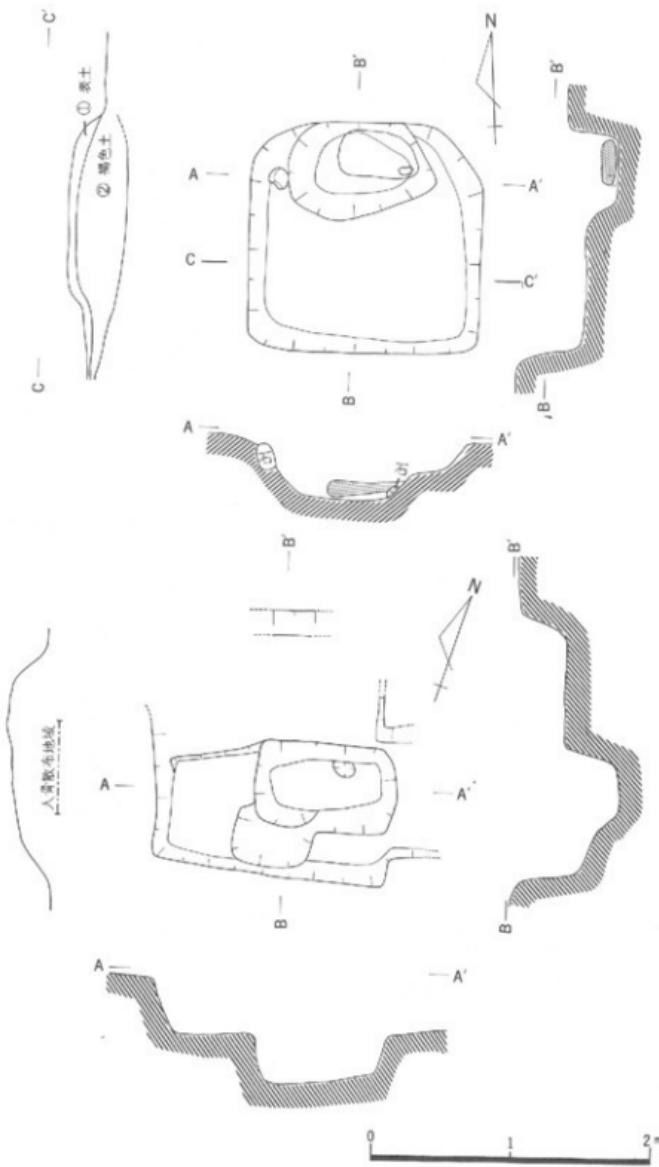
経石以外に埋納された遺物は全く発見されず、伴出遺物から築造された年代を推定することは困難であった。



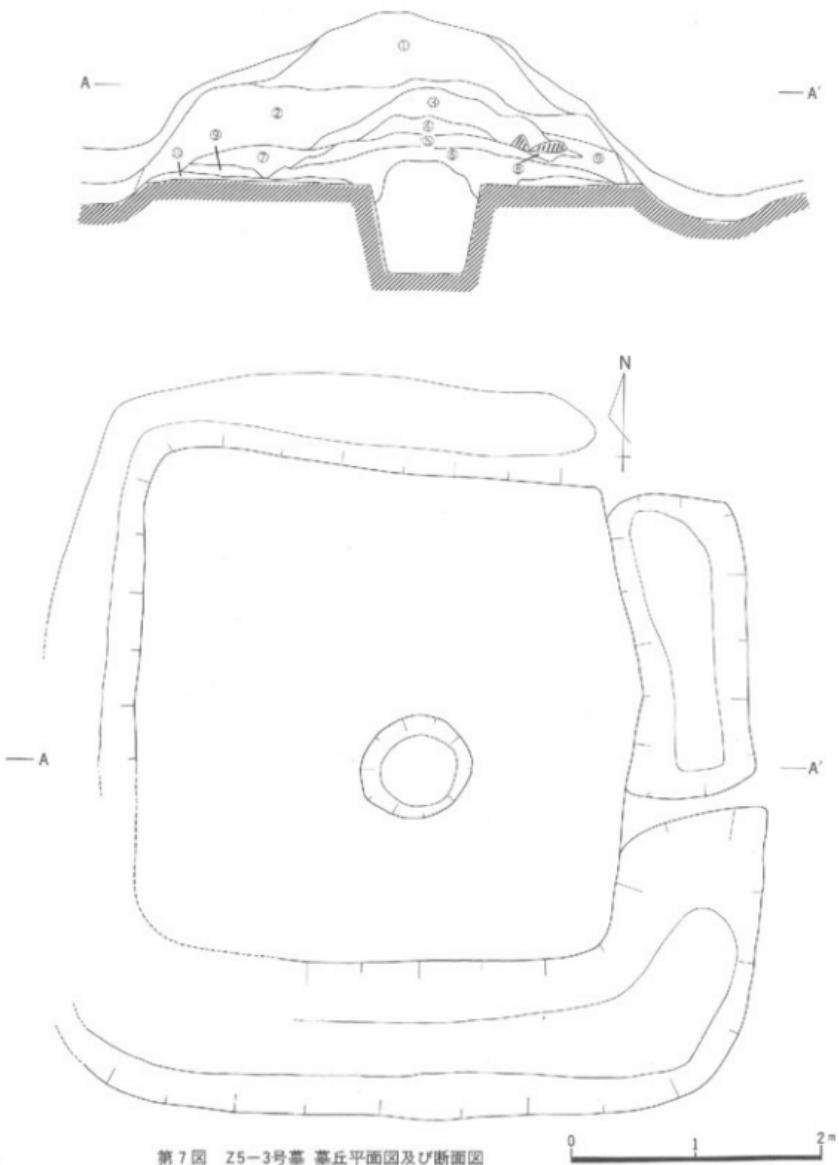
第9図 K4-3号墓 石造遺物出土状態実測図



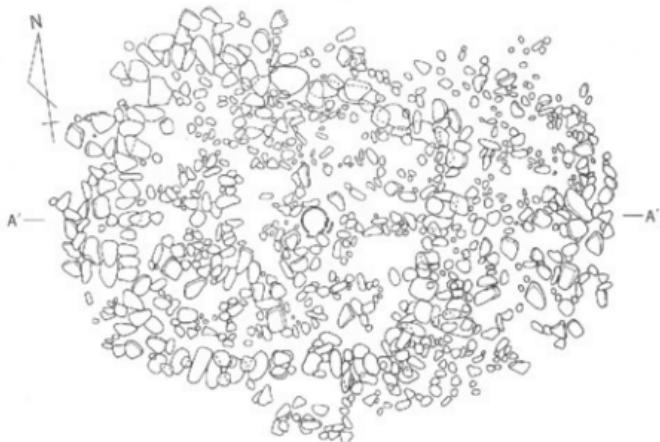
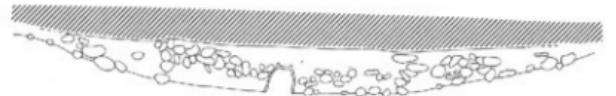
第5図 B2-10号墓 墓丘平面図及び断面図



第6図 (上) B2-4号墓 墓丘平面図及び断面図 第8図 (下) C2-1号墓 墓丘平面図及び断面図

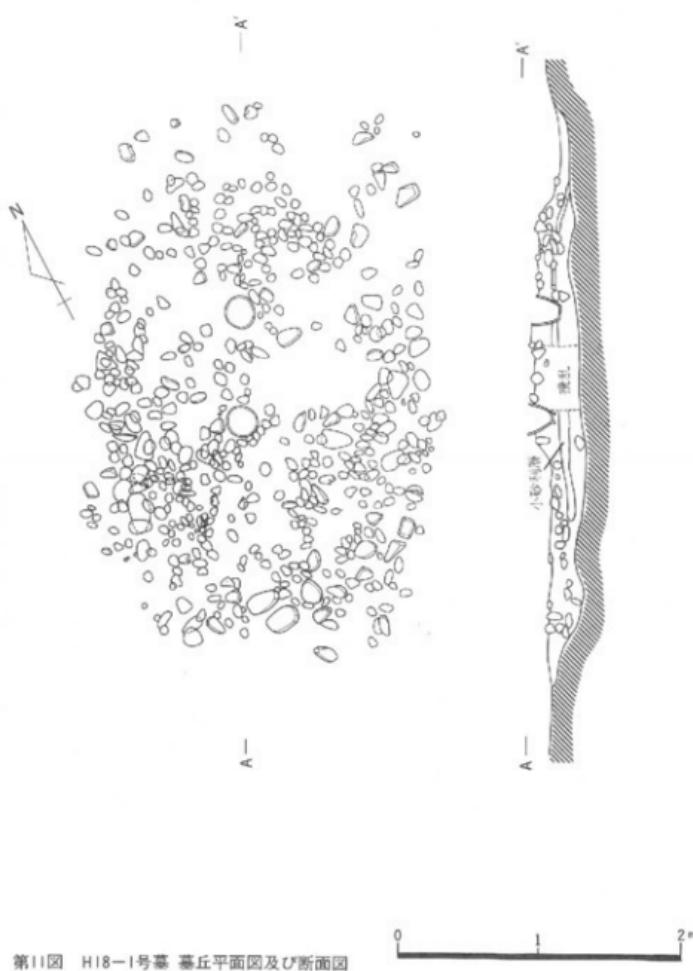


第7図 Z5-3号墓 墓丘平面図及び断面図

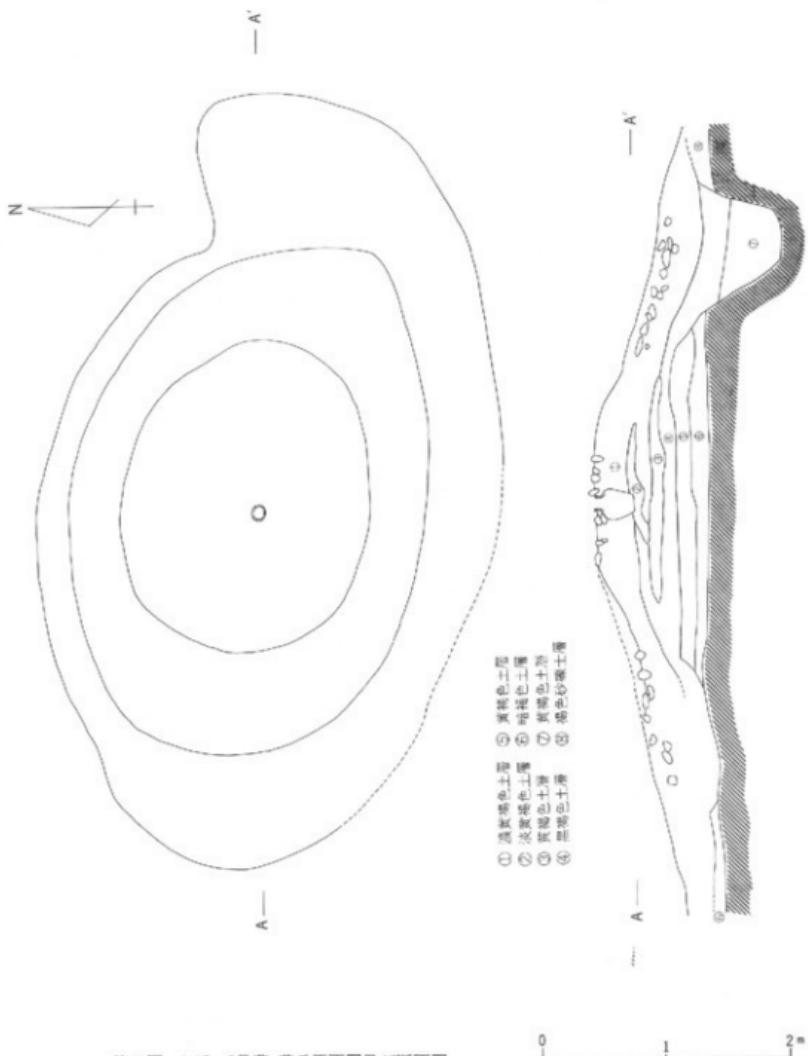


第10図 K13-1号墓 墓丘平面図及び断面図

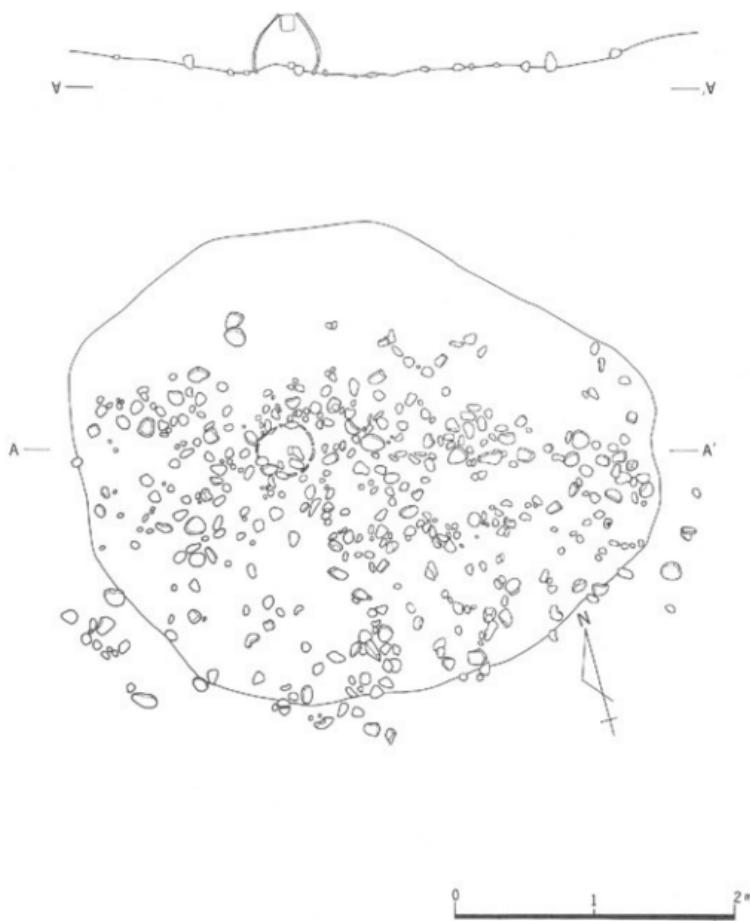




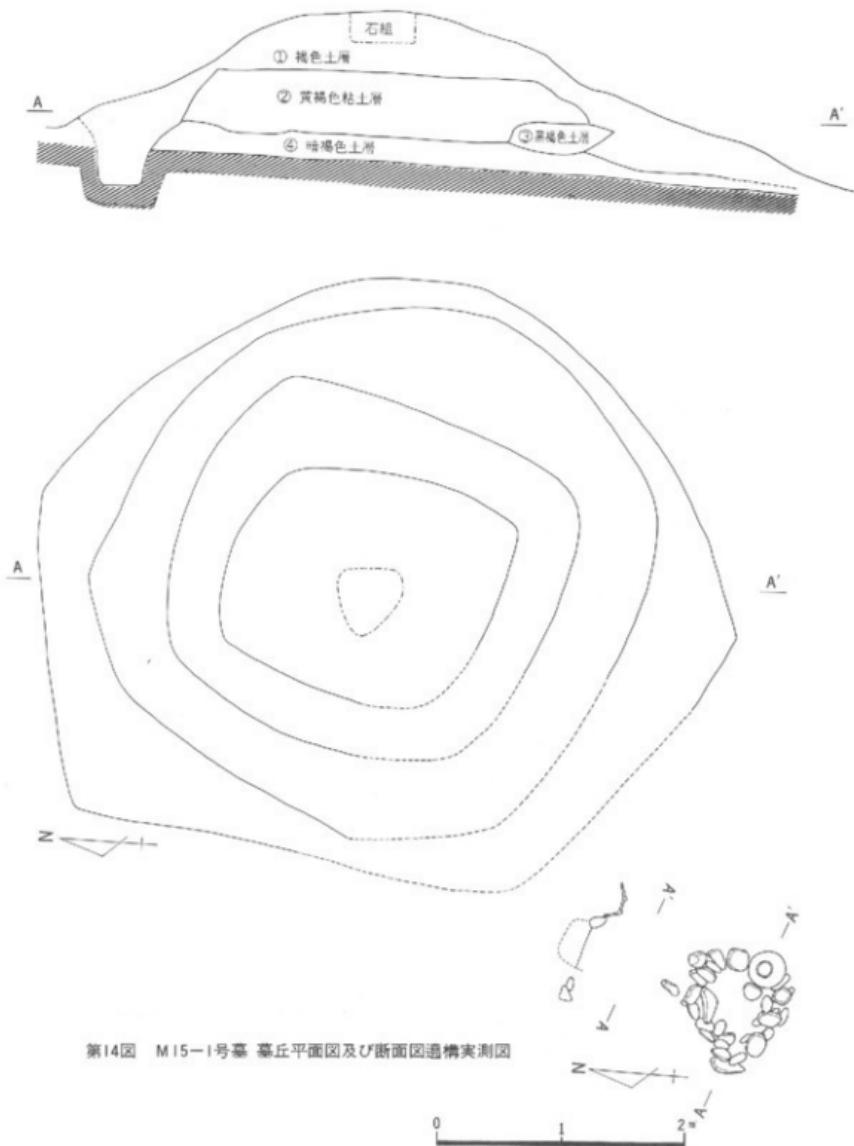
第II圖 H18-1号墓 墓丘平面図及び断面図



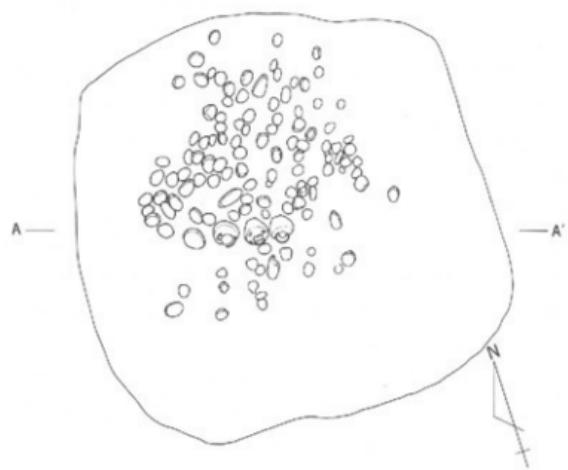
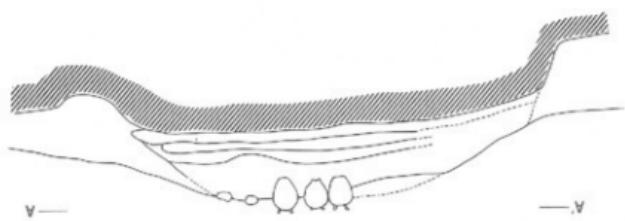
第12図 L15-2号墓 墓丘平面図及び断面図



第13図 M14-1号墓 墓丘平面図及び断面図



第14図 M15-1号墓 墓丘平面図及び断面図通構実測図



第15図 N17-2号墓 墓丘平面図及び断面図



VII. 出土遺物

陶磁器・かわらけ類

大原墳墓群より蔵骨器、葬礼、献供などに使用された陶磁器類が出土している。出土状態は前述のとおり、中世から近世、現代まで、19ヶ村の総墓として使用されていたため、後世の墓作りで前代の墓が破壊される機会が多く、埋葬時の原位置を保ったものは少く、表面採集された資料が多数である。

特に、中世の陶器類は破壊される機会が多く表面採集資料が多い。中世から近世まで各時期にわたる陶磁器が出土しているので、中世陶器・近世陶磁器・かわらけに大別して記述する。

中世陶器

中世陶器の器種は瓶子、甕、三耳又は四耳壺、山茶椀類が出土している。墳墓から出土した陶器類のうち瓶子、甕、壺は蔵骨器として埋葬されたもので、山茶椀は献供されたものであろう。

本調査で発掘された資料より後世の造墓により破壊され表面採集された資料の方が量的には多い。

中世陶器類は、生産地別にみれば、瀬戸・美濃系と常滑系ならびに渥美系の三種類に分類されるが埋葬方法や時期には係りなく、E地区N18-2号墓例の如く同一墳墓より、瀬戸・常滑、渥美の壺が横に並んで埋葬されている場合もある。次に生産地別に記述する。

瀬戸・美濃系

器種は、四耳壺、瓶子がある。

瓶子（第16図1・2）両者とも器形は、直線胴形に属す瓶子である。1は肩部から上は欠けているが、現存器高は21.7cm、最大径は肩部にあり18.3cm、底部径9.6cmを測る。

文様は現存する肩から胴上半部にかけて、梅咲き横線文が上段3条、下段4条の二段に施されている。成形技法は、粘土帯を段積みし、指先で押圧して接合し制部を形成している。粘土帯の巾は2cm～1.5cm前後で比較的狭い。釉薬は灰釉が器体全体に導く施釉されている。

2は口絞部から欠損しているが、現器高29.7cm、頭部径7.3cm、肩部径19cm、底部径8.6cmである。文様は、肩、胴上部に2段に7条の梅咲き横線文がめぐらされている。

成形は粘土紐輪積手法で粘土輪の巾は3～3.5cm前後である。器体表面は整形が良好であるが、肩内面に指圧痕が残されている。施釉は灰釉が器体全面に厚く施釉されているが肩部には卯花、描花文等は施されていない。

両者ともに藤沢氏の提唱される瓶子II^{注1}の時期に相当するもので、時期的には13世紀前半と推定される。

瓶子は表面採集資料にかなり破片が混在しているが器形の復元可能なものについては数少ない。

注1 「東洋陶磁」第八号、古瀬戸中期様式の成立過程、藤沢良祐

四耳壺（第16図3・4・5）

表面採集資料を含め多数の壺の破片が発見されているが、復元の可能なものについて記述する。第16図3・4ともに、肩部から上部が欠損しているため、全体の器形不明である。3は現存器高は22.5cm、胴部最大径21.3cm、4は現存器高20cm、胴部最大径21cmを測る。器形は、柄張りの高台から肩部にかけて胴部は丸味をもって作られている。

3・4ともに、胴部に2段、浅い輪引き横線文帯がめぐらされている。

成形は粘土紐輪積手法がとられている、器体全体に灰釉が施釉されている。肩部を欠くので耳の存在は不明であるが器形より推考して、四耳壺である可能性はきわめて高い。

5はN17-2号墓より出土したもので、ほぼ完形に近く復元された。器高は22cm、胴部最大径17.8cm、高台1.4cmの付高台が貼付されている。器形は胴部から肩部にかけてゆるく張り、口縁部は2.5cmほどの短く、口縁部は巾1cm前後の縁帶をめぐらしている。

肩部には、横位に巾3cm、高さ1cmほどの耳が四ヶ所に貼付されている。

成形は粘土紐輪積手法で器表面はロクロ仕上で整形がされ、釉薬は全体に灰釉が施釉されている5の四耳壺を始め、3・4ともに時期は13世紀後半と推定される。

渥美系

壺（第16図6）N17-2号墓より出土した完形品で、器高22.6cm、底径8cm、胴径17.2cm、口縁径10.5cmを測る。

器体は平底で胴部は張らない器形である。口縁の作りは口唇部を内傾させ縁帶を作り出している。器体は粘土紐輪積手法で成形し表面は、ヘラナデで整形している。内部に従位の浅いタタキ目が残っている。釉薬は施されていない。全体に暗灰色を呈している。特に粘土、焼成より渥美系窯の特色を示している。なお、他の採集資料中に渥美窯の生産と推定される破片が認められるが器形の復元は困難である。特に華卉文の線描きされた破片の出土していることが注目される。

常滑系

壺（第16図7）7はN17-2号墓に同図、3・6と並列に埋置されていたものである。器高は22.5cm、底部径9.5cm、最大径16.5cm、口径11cmを計測する。数値が示すように、器形は、胴張りの少ないすんぐりした形である。肩部から外側した口縁部が付けられ、口唇部を整形し、僅かに縁帶を作っている。

成形は粘土紐差上げ手法で成形されている。器体表面の整形は不充分である。粘土は常滑系窯独特の暗褐色を呈している。釉薬は肩部から上半に灰釉が施釉されている。いわゆる三筋壺の系譜に属するものであるが、7には三筋は施文されていない。

壺は西耳壺、渥美壺、常滑壺とともに時期は13世紀後半に位置づけられるものである。

壺（第17図1・2・3）

壺1は、I.15-2号墓より出土した常滑窯系の壺である。器高32cm、底径11cm、肩径25cm、

口縁径13.7cmの計測値を示している小形の甕である。器形は平底で肩部にかけて外開した胴部を示し、肩から頭部にかけながらにつぼまり、口縁部は巾1cm前後肥厚し縁帯を作っている。

肩部には二種の押印が認められるが、杉崎氏の第III型式に類例が認められる。^{注1}

甕3は、表面採集資料である。肩部から上を欠くので全体の器形は不明であるが、小型甕の形態を示している。現在は器高17.3cm最大径を示す肩部径15.8cmを計測する。

成形は粘土組巻上げ手法がとられている。器体整形は削下部半についてては從にヘラ削りで整形されている。肩部の押印は粗い針行線文が押印されている。その押印も、甕1と同様第III型式式の押印に類例が認められる。

甕（第17図2）は、小型広口甕の完形品である。器高は24.9cm、底径15.5cm、最大径23.6cm、口縁径16cmを測る。器形はずんぐりした広口甕で、口縁は直口の素縁に終っている。肩部に押印がヘラ描きされている。時期には甕1・3に比して時期の降るものと推定される。

甕類は、13世紀後半から14世紀前半にかけての時期と推定される。

山茶椀（第17図6・4・5）山茶椀の破片は、いくつかの墳墓より出土しているが器形の復元の可能なものはきわめて少量である。

5は、M15-1号墓より出土した完形品である。口径14.4cm、器高4.3cm、断面三角形の0.3cmと低い付高台である。底部は糸切底で一部にモミ痕が残っている。器形は底部から直線的に外開した胴部に口唇端を内傾に直裁した素口縁に終わっている。

4は、M15-2号墓より出土したもので、器形を推定できる程度に復元された。復元口径は14.9cm、器高5.6cm、付高台は、0.5cm、断面台形状の低いものである。

器形は胴部がやや張り、口縁はわずかに外反し口唇部は小さな玉縁状に整形されている。胴外面にはロクロ目が残っている。両者は、器形、規模より時期的には山茶椀第III期に属するものと考えられる。^{注2}

近世陶・磁器類

近世陶・磁器については、三耳藏骨器やかわらけのように埋葬用を目的に製作されたものと日常什器として作られた、甕、茶入、小鉢、合子等が転用されて埋葬されたものとに大別される。また、仏具類として作られた陶磁器が1点も出土していないことも特徴としてあげられよう。

三耳藏骨器（第17図9・8・10・11 第18図1）

いずれも火葬骨を納骨し埋葬することを目的に製作されたものである。

第17図9・11は器高23cm、胴径19cm前後で大形である。8・10は前者よりやや小形で器高19cm、胴径14.5cmを計測する。

器形はいずれも平底で胴部は円筒形をなし肩からやや細くしまり、短い頭部に素縁の口縁部で終る。第17図11は、口縁が折返されて縁帯を形成している。肩部に横位に三ヶ所耳が貼付されている。

注I 常滑窯業の歴史（概説、平安鎌倉室町時代）杉崎一章。

注II 美濃焼（考古学ライブラリー17）丹口昭二。

釉薬はIIは灰釉、8～10は黒褐色釉（鉄釉）が施釉されている。第18図1は無釉で胴部に千段巻状の痕跡を残している。

三耳蔵骨器の11・8・9・10は粘土・釉薬から瀬戸・美濃系窯場で生産されたものである。第18図1については、粘土に鉄分が多く、無釉であるが暗褐色の焼成で、瀬戸・美濃地方の製品とは異質なものである。地元窯の製品とも推考される。三耳蔵骨器は、瀬戸・美濃地方では江戸中期以降に類品が認められ、18世紀以降のものである。

三耳蔵骨器蓋（第17図9-2）三耳蔵骨器9（第17図9）に伴う、はめこみ式蓋である。器形は皿状を呈し回転糸切底から外側した胴部は口縁部で外に折り曲げられ錐状の身受けが作られている。皿状内面中央に径1cm、高さ0.5cmのつまみが造出されている。また内面縁に細い沈線で二重円形文がめぐらされている。大きさは外径10.8cm、高さ2.9cmを測る。同図③はかわらけが蓋として利用されている。

壺（第18図2）器高16.4cm、口縁径16.4cmの直口の水壺である。胴上部に二条の低い突帯がめぐらされている。器全面に鉄釉が施釉されている。瀬戸・美濃地方窯地生産品の陶器に類品が認められる。

肩衝茶入壺（図版第3-2）器高は8.7cm、胴部径6.4cm、口径3.5cm、底部は平底で回転糸切り底になっている。口縁部から胴下半部まで黒茶色の鉄釉が施釉されている。

瀬戸・美濃系窯の製品であり、17世紀のものと推定される。

出土状態は、壺の蔵骨器の中に歯だけこの茶入小壺に入れて埋葬されていた。

細頸壺（第18図11）口縁部を欠くため全長は不明であるが現存器高13.5cmである。器形は底部から胴部にかけて丸味をもっているが、胴部は短く、なで肩で細頸になっているが口縁部を欠く。底は静止糸切底である。腰部に巾1cmほどの浅い沈帶がめぐらしている。類品は瀬戸・美濃系窯にみられ、時期的には18世紀末から19世紀前半期と推定される。K18-1号墓より出土しているが内部に入歯が埋納されていた。

片口小鉢（第18図6・7）日常食器として生産されたもので、6 K18-2号墓、7はH18-1・2号墓より出土している。両者とも口径10.5cm、器高4.15cm、高台は0.7cmでヘラ削りで面取がされ、きわめてよく整形されている。釉薬は内・外面に黄緑色の釉薬が施釉されている。

蓋付鉢（第18図3）器高10cm、胴径10.5cm、底部から肩部にかけて、ゆるやかにふくらみを持ち、肩部から口縁部にかけてしまり直口縁を作っている。器体は粘土巻上げ手法の痕が残っている。底部は平底である。

蓋は表面の中央に、高さ0.7cmほどのつまみが付けられ、内面には0.5cmほどの身受けの縁がつけられている。嵌込み式蓋である。鉢身・蓋とも表面に鉄釉が施釉されている。

油壺（第18図8・9）8は器高15cm、胴径9cmを測る。器形は胴長で、肩部から頸部にかけて、ゆるやかに細くなり頸部は径2cm、長さ2cmほどの短い頸部に続き口縁径は2.4cmを

測る。口縁の造りは巾0.8cmほど外に肥厚させ縁帶を作っている。肩に巾0.8cm、高さ0.6cm前後の突帯を鉗状にめぐらし、一ヶ所に径0.3cmほどの穴が穿たれている。胸上部には環状把手が付けられる。第18図8は、第17図11内に納められていた。

用途は油壺として用いられたもので、油を注いだ時、重れた油が肩で止められ、穴を通じて壺にもどるようになっている。焼成は暗赤褐色を呈し釉薬はヒサ釉が施されている。通称備前写しと呼ばれている、19世紀代のものである。9も全く同型のものである。

合子（第18図5） 器高4cm（合子身高3.3cm、蓋高1cm）器経6.7cm、底は0.3cmの低い高台が削出されている。釉は底裏を除いた器体表面に淡灰青色の御深井釉が施釉され、また身内面にも施釉されている。粘土は乳白色の炻器質のものが用いられている。

器体はきわめて薄く蓋の肩は面取りがされているなど精巧な作品である。瀬戸・美濃系窯のもので生産された時期は17世紀後半と推定される。

磁器

陶器に比して磁器はきわめて少なく、その多くは現代の染付湯飲み茶碗類であるが代表的なものについて記述する。

染付蓋付鉢（第18図10） 吴須染付の草花文鉢で、有田・伊万里系の製品である。時期は18世紀代のものと推定される。

染付茶碗（第18図12） 瀬戸・美濃系窯で生産された磁器とともに、吳須染付であり、19世紀代の製品である。12は、本来食器として生産されたものが転用されている。その他、この時期に属する小皿も出土している。

かわらけ（第19図）

本稿で、かわらけと呼称するのは素焼の杯で焼成は柔質、色調は暗褐色から赤褐色を呈している。成形はロクロ成形が主体であるが僅かに手捏ね成形のものも混在する。これらを一括して、かわらけと呼称する。

かわらけの出現は陶磁器の普及した近世以降に祭祀や葬礼に獻供する器として生産されたもので特定の窯場を限定することは困難である。

本遺跡でも近世墓より多数出土しているが、これらの資料は形態的にI～III類に大別することが可能である。

I類（1、2、3、4、5、6、7、8、9） I類として分類したものは、口径10cm～9cm前後で、器高が2.5cm～3.3cmとおよそ口径の3分の1前後の深さをもっている。全体的に器体はよく整形されている。底部は回転糸切底で胴部は直線的に外開し、口縁部は口唇端を内湾させているものと素縁に終るものとがある。

II類（第19図10、11、12、13、14、15、16） II類は口径7cm前後、器高2cm前後とI類に比して小型である。器形は底部から僅かに立上った腰部から胴部は直線的に外に開いた形となり、口縁部は口唇端を丸く整形している。

成形は底部は回転糸切底で杯身内面にロクロ成形のノタ目をはっきり残している。胴部外面はよく整形されている。10、11は三耳蔵骨器（第17図9）内に入歯を入れて埋納され、12は蔵骨器（第17図8）内にそれぞれ埋納されていた。

III類（17、18、19、20、21、22、23）口経7cm～6.5cm前後、器高1.5cm～2cmの浅い杯である。器形は底部から口縁部にかけて胴部は丸味をもち、口縁は内湾している。II類との相違点は、最も小型で全体的に丸味をおびている点である。杯身内面は全く整形されていないため、ロクロ痕が段をなしている例が多い。

その他に第19図24のごとく粘土紐巻上げ成形の手捏ねのかわらけが1点だけ出土しているが特別なものである。

かわらけの時期を推定する手がかりとなるものについては、三耳蔵骨器（第17図10）の蓋に利用されていたかわらけは、I類に属するものであり、三耳蔵骨器が18世紀後半の時期と推定されるので、かわらけも同時期に比定できよう。II類の10、11、12は三耳蔵骨器内に埋納されていたもので、蔵骨器と同時期と考えられるのでII類も18世紀後半である。

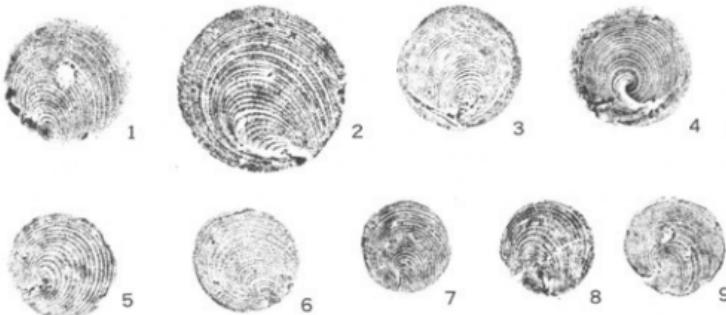
I・II類ともに同時期と考えられる。

形態的な変遷では、I類からII・III類へと推移が考えられるが、I・II類には大きな時間差は考えられない。形態的な相違が時間差でないとしたら、生産地の相違も考慮されなければならない。

いずれにしても、18世紀後半から19世紀代に比定して大過ないものと考えられる。

なお怡上がり水漉されている近代・現代のものは除いた。

大原遺跡



1.三耳蔵骨器蓋 2~4.かわらけI類 5~6.同II類 7~9.同III類 回転糸切底、拓影

2 石造遺物

本墳墓群より出土した石造遺物は、I. 宝慶却塔、II. 五輪塔、III. 一石五輪塔、IV. 一字・石経石があげられる。

このうち、一石五輪塔、経石を除いて、宝慶印塔の相輪、笠部、塔身、基礎、五輪塔は空・風部、火・水・地部の各部品が出土している。

石造遺物の出土状態より観察して、原位置を示すものではなく、五輪塔、宝慶印塔も各部分を組合せられる状態で出土したものはなく、復元することは不可能である。石造遺物は建立された本義を或る時期から失い、後世の墓を飾く石材として転用されている例が多く注目される。

石造遺物には、銘刻のものではなく年代を示す資料に欠け、また、再利用されたものが多くまた併出する陶器類はなく、併出遺物より年代を推定することは困難である。本出土遺物の間で形態の変遷を分析し、他遺跡出土遺物と比較検討する以外に有効な手立てがない。この観点にたって記述を進める。

宝慶印塔

宝慶印塔は下方から基礎、塔身、笠、相輪の各部分の組合せにより成り立っている。本遺跡よりは、相輪 10点、笠 4点、塔身 1点、基礎 3点が出土している。前述のとおり各部分に分離して出土しているため同一個体と推定できる組合せはない。

一石五輪塔に比して数量は少ないが、相輪の数より、10基以上が建立されていたことはまちがいない。石材は各部分とも同一の砂岩を石材として利用している。

1. 相輪 相輪は宝珠、請花、九輪、請花、伏鉢の五部分を一石で彫刻して造り出している。完品はNo24-1・2・28の3点で、残6点については、両端部に欠損が認められる。

出土資料が少なく形態の変遷をたどるには資料不足であるが次のように大別できる。

A類 宝珠形が丸味をもち、請花に草弁八葉連花を刻み、九輪部の各輪の境界の刻みは深く、輪の巾は狭く、数が多いものNo29・42に代表され下の請花や伏鉢部が欠損しているので明確でない。（第20図1・2）

B類 宝珠形の丸味が少なく、上・下の請花は刻が浅く、A類に比して簡略化され、沈線による蓮花文が刻まれている。輪の数は、3輪、4輪と少なく、各輪の巾も広くなっている。全長は短くなり、長さに比して直径が太く、すんぐり型が本遺跡出土の特徴でNo24・28に代表される。（第20図3・4・5）

第2表 宝篋印塔（相輪部表）

No.	宝珠幅	九 緒			金 高	挿入部	備 考
		輪 数	九輪幅	九輪各幅			
24-1	5.5	3.6	3	7.4	1.6	5.5	7.5 33.8 4.3 宝珠は所謂「桃形」を呈し整った形をもつ。九輪部は三輪と造りに難がみうけられ（輪の間隔を広くし、造りを簡略化している傾向が認められる）、下部の高さを増し、全体の均衡を保とうとしている。（第20図5）
24-2	5.7	4.4	4	10.3	2.0	4.3	3.6 32.3 4.0 宝珠は押し潰された形を呈し、上部は伸び気味。受けには縦刻による蓮弁が刻まれる。九輪部は四輪と難さはみとめられるが、九輪部の幅はあり、その為下部の高さはさほどない。（第20図3）
28	欠損	3.5	4	7.8	1.0	3.8 (現存高) 24.4 (推定) 31.1	5.5 3.8 受けには縦刻による蓮弁が彫られる。九輪部は四輪で難な造り。高さもなく、その為下部で高さを増し均衡を保とうとしている。全体に丸味ではなく四角気味。（第20図4）
40	欠	欠 (現存) (4)	11.8	2.2	3.6	6.3	— 欠 九輪部は現存四輪だが、総数はそれ以上あったと考えられる。九輪部の高さは比較的ある為、九輪下部のみ高さをもたしている。が、輪の間隔は広く難なつくりである。（第20図9）
31	欠	欠 (5)	7.6	0.9	4.6	4.7	— 欠 九輪部は五輪現存しているが、それ以上あったと考えられる。高さの割に輪数があり、大阪でみとめられる宝篋印塔でも古手といえるか。下部の高さも全体の比でみれば低いといえる。（第20図8）
29	9.2	3.5 (推定) (7)	14.0	1.3	欠	欠	— 欠 宝珠は上部が伸び気味である。受けには縦刻であるが蓮弁が彫られているが、他のものに比べ造りがしっかりしている。九輪部は現存7輪であり、各輪の間隔も広く造られている。（第20図1）
38	欠	欠 (欠 (1))	欠	1.8 4.4 2.7	3.1	— 欠 九輪部もほとんど欠損しており、全体の形状を窺いるのは無理だが、各輪の巾は広く、他のものと同様、輪部の巾を広くすることで輪の数を省略したものだろう。下部は三段設けられ、他のものと大きさ異なるが、中段は般下様が二つに分化したものと考えられようか。最下部の輪部は欠損しているが、縦き具合より、根元が広い形をもつと考へられよう。	
19	欠	欠 (欠 (2))	欠	2.0	4.8	欠	— 欠 九輪部は輪の間隔を広くすることで輪数を省略する形態のものである。下部も他のものと同様高さをもたらせ、均衡を保たせようとするタイプである（第20図10）
42	9.1	6.0 (欠 (1))	欠	1.7	欠	欠	— 欠 宝珠部は上部が若干伸び気味である。全体の形としては、重心が上方にあり、所謂「桃形」とは若干異なる。受けには浮彫手法による蓮弁が刻まれる。九輪部は全体の形を出すのは無理だが、輪の間隔は広いが、輪のつくりは他のものが、浅い彫りによってつくられているに対し、明確に浮きだされており、他の宝篋印塔とは異なる技法のもので造られたといえようか。（第20図2）
36	5.2 (現存) 4.0	欠	欠	欠	欠	— 欠 宝珠は押し潰された「桃形」を呈し、上部の突起は明確には表現されていない。受けの肩は張っており若干外にふくらんで、九輪へと統く。	
34	6.6	4.1	欠	欠	欠	欠	— 欠 宝珠は上部の突起の表現はなく、全体が上方へ伸びる如く表現される。重心は上方へあり「桃形」とは異なる。受けの肩の造りもはっきりせず、退化の傾向がある。（第20図7）
32			欠 (2)	欠	0.7	欠	— 欠 宝珠は全体が上方へ伸びたタイプを呈すが、受けへと統く部分は明確に表現されている。受けも肩が張り、しっかりした造りである。九輪は輪の間隔が広く、輪の数は九輪もしくは、それに近い数彫られていたと考えられる。（第20図6）

第3表 宝篋印塔（各部表）

No.	名 称	器 高	横 幅	備 考
53	台 座	15.2	17.2	砂岩製で塔心の四方に梵字が刻まれている。表面は磨れているが、上部は若干盛りあがり、また下部は若干くぼんでノミの跡が明瞭にのこる。断面は長方形。
54	台 座？	12.0	15.4	表面は平坦に造られているが、磨く等の技工は認められない。台座の下部は、製作時のままのノミ痕がのこり、中央が若干くぼんでいる。上部は無面同様、平坦に加工されている。
56	台座又は宝篋印塔身	11.5	13.0	断面は長方形で側面には直径7.7cm、深さ約7mmのくぼみがつくられているが、格状間の変形か、宝篋印塔の梵字の変化したものか定かではない。上部、下部共に、ノミ痕が明瞭にのこり、技工としては稚拙である。
55	台 座？	10.5	12.8	断面は長方形であり、側面は平坦に造られている。上方と下部は、中央が若干くぼんでおり、各面はノミの跡が明瞭にのこる。
57	台 座？	12.5	13.5	断面は長方形である。無面は平坦面に造られているが、ノミの跡が若干のこっている。上部と下部は中央が若干くぼんでおり、各面にはノミ痕がのこる。
52	宝篋印塔台座	19.8	17.5	台座は上部に二段の棱を設けている。棱は上方に若干せばまれている。側面は平坦につくられているが、ノミの痕跡が多くのこり、丁寧な造りとはいえない。上部は平坦に造られているが、ノミの跡がのこり、凹凸がはげしい。下部は中央がくぼみ、ノミの跡がのこる。
56	宝篋印塔台座	19.0	19.0	台座は上部に二段の棱を設けている。棱は上方にせまくなる。側面は平坦であるが、ノミの痕がのこり、起伏がはげしい。上部はノミ痕がのこるが、比較的平滑である。下部が中央が、大きいくぼみ、ノミ痕が多くのこる。
59	宝篋印塔台座	13.5	18.0	台座は七部に二段の棱が設けられ、横幅に比べ高さがない。側面はノミ痕が残るが、比較的平滑である。彼は肩のつくりが甘く、段の形がはっきりしない。上面はノミ痕がのこるが、比較的平滑であるが、下部はノミ痕がそのままのこっており、起伏がはげしい。
55	台 座？	10.9	13.2	断面は長方形。側面はノミ痕がのこるが、平滑に仕上げられている。上面と下面は、製作時のままで器面の起伏が激しい。
49	宝篋印塔笠部	12.1		隅付突起は、立ちあがり気味で、垂直に近い。突起の表面は平滑に仕上げられているが、他に認められる様な縫割による溝は描いていない。突起間に、上方三段、下方一段の段がつくられている。上方の段は、しっかりとした造りで、最上段には直径7cm、深さ3.3cmの相輪部の鉢入部の受け穴がある。穴には、ノミの跡がのこる。下方段は、直線で、狭まる形をしており、面上にはノミの跡がのこり、起伏がある。
47	宝篋印塔笠部	11.4		隅付突起は垂直に立ちあがりで、表面は平滑に仕上げられている。又、縫割はない。上方に三段、下方に一段の段をもつ。各段自体の高さが比較的高い。各段の肩のつくりは甘く、段自体の形状ははっきりしない。上段の面には、相輪の接続の為の孔があり、直径7.1、深さ3.5で設けられており、穴の内面には、ノミ孔がのこる。最下段面は、ノミ痕がのこるが、平滑に仕上げられている。
46	宝篋印塔笠部	13.1		隅付突起は垂直に近い立ちあがりで、表面は平滑に仕上げられている。又、縫割はない。上方に三段、下方に一段の段をもつ。各段の肩のつくりは甘く段の形がはっきりしない。上段の面には、相輪部の接続の為の孔があり、直径6.8cm、深さ3.9cmで設けられている。下方の段の肩のつくりも甘く、下段は平滑に仕上げられているが、ノミの跡がのこる。
45	宝篋印塔笠部	12.		隅付突起は垂直に近い立ちあがりで、平滑に仕上げられている。縫割はない。上方に三段、下方に一段の段をもつ。各段の肩のつくりは甘く段の形がはっきりしない。上面には、相輪部の接続の為の孔があり、直径6.8cm、深さ3.9cmで設けられている。下方の段の肩のつくりも甘く、下段は平滑に仕上げられているが、ノミの跡がのこる。

2. 笠部 5点出土しているが、軒上三段、軒下一段のものが4点、軒下無段のものNo48がある。隅飾はほぼ垂直に立ち、軒上三段の上端近くまで立上りをみせている。隅飾には、M形を横にした様な線刻があり、蓮葉を表現している。線刻の蓮花文の相輪に組合せられるものである。（第20図11 図版9の4）

3. 塔身部 No.53は砂岩製、大きさは器高15.2cm、横巾17.2cmの横長の立方体で四方に梵字が刻まれている。（図版9の6）

塔身か、五輪塔の地部か判断し難いものが4点出土している。（第3表示）

4. 基礎部 宝篋印塔の台座部をなすもので上端部は二段の段を造出している。No.52・56は、器高19.8cm、横巾17.5cmの長方体であり、No.59は器高13.5cm、横巾が18cmと横長の立方体を呈す。この二種類があるが形式の変化かどうか明らかでない。

五輪塔

五輪塔は立方体の地輪、珠形の水輪、笠形の火輪、請花形の風輪、宝珠形の空輪の五輪から成り立っている。本遺跡より出土した五輪塔は、きわめて少量で、空・風輪 3点、火輪 1点、水輪 2点、地輪は明確でないが3点出土している。いずれも紀年銘刻はなく、直接に年代を知る資料に欠ける。

1. 空・風輪 空・風が一石で造り出されている、No.22は宝珠形が桃実形を呈している。風輪は、下方に直線的に狭くなり下端部に火輪との組合せ突起が造り出されている。突起は上端で直径5cm、下端で3.5cm、長さは約2.8cmで断面は正円形に近い。（第21図14）

No.26の空輪は球形に近く、風輪との境も浅い。風輪は上端から直線的に狭くなり逆台形を呈している。風輪下端の中央部に火輪との組合せ用の穴が彫り込まれている。穴は直径1.7cm、深さ1.7cmを測る。（第20図12）

2. 火輪 火輪はNo.15が1点だけ出土した。器面は全体に平滑に磨かれて仕上げられている。軒端の厚さはうすく、形は軒隅がやや反り上る。上端面に直径2cmほどの穴が彫られ、空風輪を受ける形をとっている。

3. 水輪 2点出土しているがNo.21は器高11.3cmに対し、直径18cmを測り全体的に扁平な球形を呈している。最大径は球の中央部にある。No.30は器高6.3cm、径10.3cmと前者に比して小形で、両端はやや丸味をもっているが、胴部は直線的である。石材は両者とも砂岩である。

4. 地輪 宝篋印塔の塔身との区別が形態的に明確でないが、No.54・55・57は五輪塔の地輪の可能性が強い。No.54を例にとれば、器高12cmに対し横巾15.4cmと横長の立方体で側面は平滑に仕上げられている。上・下両端面には製作時のノミ痕を残している。

一石五輪塔

五輪塔の空・風・火・水・地の各部分を一石で刻み出しているのが一石五輪塔である。

本墳墓から合計25点出土し石造遺物として最も量が多い。一石五輪塔には紀年刻銘を刻まれているのではないか、梵字が刻まれているのがNo.19一例ある。風化が激しく梵字の形態は不明

第4表 組合式五輪塔

番号	名 称	空輪高	風輪部名	備 考
26	組合式五輪塔	7.3	4.8	空輪部は「桃形」を呈さず球形を呈し、上方には突起をもたない。風輪部へ続く塊は明確に造られているが、風輪部の肩は若干くずれ気味。風輪部は直線的に下方へ続く。又、底には直径1.6cm、深さ1.7cmの穴があけられており、火輪との接続を行なう。又、風輪部の表面には製作時の痕跡と思われる条痕が認められる。“砂岩製”
36	組合式五輪塔	5.1	欠	宝蓋印塔相輪部などの組合式五輪塔なのか現状からは不明である。宝珠部は、重心は上にあり、若干押し潰された形を呈しており、所謂「桃形」ではない。上方は風化によって定かではないが、若干突起をもっていたと考えられる。請花は肩が張っており、造りとしては古手といえよう。
22	組合式五輪塔	6.9	5.5	空輪部は下方に重心があり、上方には若干伸び気味の突起をもつ。風輪は肩が若干くずれ、下方にいくにつれ狭くなっていく。挿入部は欠損しているが下方にいくにつれせまくなる。又、断面は正円に近い。風輪部との境界には製作時の痕跡と思われるノミの跡がのこる。

番号	名 称	器 高	横 巾	備 考
15	組合式五輪火輪部	7.7	15.8 棟幅=1.3	器面は磨かれ、平滑に仕上げられている。祀きで棟の先端は、若干立ちあがる。後の巾はうすく、中央で多少たるむ形をとる。風輪部との接合は、直径2cmほどの孔がほられており、さしこまれることで行なうと推定される。水輪部との接続は直接おかれるものと思われるが、接合面は若干突出しており、面はノミ痕がのこり、起伏がはげしい。
21	組合式五輪塔水輪部	11.3	直徑=18	水輪部の上部、下部共に直線的だが、両面共に中央がくぼみ、ノミ痕がのこり、起伏がはげしい。水輪部は球の中央は中心にあり、平滑に仕上げられているが、ノミ跡がのこる。
30	組合式五輪塔水輪部	6.3	10.3	上面、下面共に中央がくぼみ、ノミ痕がのこり、起伏が激しいが、礎部は直線的に造られている。水輪は球形ではなく、直線的であり、上面、下面端近くで若干丸みをもたす。

である。製作された年代を知る資料は皆無である。

出土品を検討した結果、形態上、三分類に大別することが可能である。形態的には細部の検討をすれば、かなりの差異が認められるが、この差異がただちに製作された年代差を示すものかどうかは今後の課題である。

一右五輪塔を形成している各部分の特徴を整理すれば次のように分類される。

1. 空輪

A類 全体の形状は宝珠形を呈し、重心が低く風輪との境は内湾している（第22図1・2・3
第23図14）

B類1 宝珠形の突起は低いが、全体の重心は高くなってくる。風輪との境は内湾している。
A類との差異は宝珠形の重心の高さにある。（第22図5）

B類2 宝珠形の重心が高く、突起部も高くなる。風輪との境が、前者と異なり直線的になる。（第23図9）

C類 宝珠の形が崩れ、直線的な三角形を呈し、風輪との境も明確に欠けてくる（第23図
11 第21図18）

風輪

A類 内湾しながら下方が狭くなり、火輪との境は明確に刻まれている。（第22図1・3・5
第23図10・11・14）

B類 若干のふくらみを残すが、直線的になり、火輪との境に明確である。（第23図8・13
第22図2・6）

C類 直線的で火輪に続く境界は不明確になってくる。（第21図18）

火輪

A類 全体的に台形を呈し、上段中央部がややくぼみを持ち、段の尖端部が若干突出し、五輪の笠部の形態を残している。（第22図1・5 第23図10・14）

B類-1 火輪の中央部に段を造出しているが直線的になる（第23図8・13）

B類-2 中央部の段がなくなり直線的になる（第23図11・14）

C類 より直線的簡略化されたもの

上記のように、A・B・C類の三タイプに大別されるが、B類についてはA類に近いB類-1とC類に近いB類-2に細分することが可能である。各類の特徴について要約すれば次の通りである。

A類は各輪の彫り込みも深く境も明確に刻まれ、器体の仕上げ調整もていねいで五輪本来の形態を表現している。

C類については各輪の彫も浅く、本来の形態が崩れ直線的な形になり、器体の仕上げ調整も荒く、全体的に粗雑化している。

B類 この両者の要素を持ち、中間的な形態・仕上げ調整がB類である。

一石五輪塔のうち、空・風・火輪によく特徴が表現されているので、この三点を中心に分類を試みた。

次に本遺跡より出土した一石五輪塔25点中完形品及び全長の推定できる16点について、器体全長を測ると、No12の34.7cmが最も大形であり、No16が20.9cmと最小であるが、この間に大・小形に2分することが可能である。

大形は34.7cmから、28.1cmまでのもので、尺貫法では1尺5寸から8寸4分の間にあるもので、No10、12、8、6、9、1、3、44)の9基である。

小形としたのは、26.1cmから20.9cmまでのもので、尺貫法で7寸9分から6寸5分までに属しているNo27、5-2、43、16、17、20、4)の7基である。

規模と形態分類の相関関係についてみれば空風火輪のA類に分類されたものはすべて、大形に属し、8寸5分までの間にある。また、C類はすべてが小型である。規模からみても、大形はていねいな仕上調整であり、小形化するほど仕上げの調整は粗雑化することが明らかである。

次に各輪の全長に対する比率については、第5表に記したとおりであるが、特に地輪に変化が認められ、A類は、高さ、巾、厚さともに等しく正方体に近い形状を呈している、C類は地輪の高さに比して厚味がなく、第21図15断面図に示されるように、巾に対し厚みが薄くなり扁平化しているのが特徴としてあげられよう。

石材については、すべて砂岩質であり、他の石材は使われていない。

形態の変遷、規模の大小の差異は、製作地や石工集団ではなく、時間差としてとらえている。

時期については、銘刻されたもの及び原位置を示し、且つ、時期を明らかにする伴出遺物がなく、直接年代を推考する手立てに欠けるが、最近の調査実例として高野山調査例が精度が高く資料も豊富であり、比較検討資料として好例である。

高野山出土例に対比ながら、本遺跡出土の一石五輪塔の年代を推定すれば室町期から安土桃山期のものと推考される。

一字一石経石

遺構の項で記述した如く、K13-2号墓は経文を石に墨書きしたものを埋納した一種の縁塚である。一辺2m、高さ0.55m前後の塚を小礫で積み上げているが、この総量については計測していないので不明である。

発掘時に扁平で経石の可能性のあるものを151点を選出し精細に検討した。この結果、墨書の文字の明らかなもの、墨の痕跡のあるものを含め61点が検出された。

経文の書れている礫は、すべて扁平な川原石で、しかも、表面の平滑な石が選ばれている。

自然石のため大きさ、形にはかなり差があるが、形は円形又は橢円形に近いもので、大きさは、最大が経石No.39の長径64.8mm、短径49.4mm、厚さ18.2mmで最小のものは経石No.51の長径28

第5表 一石五輪塔計測表

規格	No.	全高	空軸高	風輪高	火輪高	水輪高	地輪高	空	風	火	水	地	備考	空	風	火	図書号
⑩	10 (5分)	6.0	3.0	6.3	5.0	11.0	19.2	9.6	20.1	16.0	35.1		⑥突起は未発達 ⑦市は巾厚で中段突出 ⑧押し潰された感じ ⑨正方形 やや縱長になり安定性に乏しい。 (見た目に不安定) ⑩	A	A	A	図版10-3 特22-1
⑪	2 現在	欠損	3.2	7.8	7.0	11.7	欠損	10.8	26.3	23.6	39.4		⑥下づくれて巾が厚い ⑦直線的 ⑧棱は下方で突出 ⑨正方形 やや縱に長く見た目に不安定	B	B-1		〃 23-8
⑫	3 現在	欠損	3.9	6.6	4.9	12.3	欠損	14.1	23.8	17.9	44.4		⑥丸味はあるが、高さがある ⑦巾厚、中段後ナシ ⑧押し潰されたソロバン玉 ⑨断面は正方形だが、伸び気味、(安定性を欠く)	A	B-2		〃 23-14
⑬	7 現在	欠損	3.7	5.9	4.9	9.9	欠損	15.2	24.2	24.0	40.6		⑥丸味欠かずが直線的つくり ⑦直線的中央の稜は有 ⑧おし潰された感じ ⑨正方形、若干上にのびる全体が直線的であり安定性に欠ける	I	B	B-1	〃 21-19
⑭	18 現在	欠損	7.0	3.6	13.7	欠損	欠損	28.8	14.8	56.4		⑥底広がりの台形、中稜はやや下方にある ⑦押し潰された形で小さい ⑧上に伸びており、異様に大きい。(一回り大きい) (高さもしない)	A			図版10-5 特21-20	
⑮	12 (5分) 上部欠	34.7	6.7	3.8	6.4	5.0	12.8	19.3	11.0	18.4	14.4	36.9	著者				図版10-7 特23-9
⑯	8 上部欠	34.6	7.7	3.2	6.4	5.6	11.7	22.3	9.2	18.5	16.2	33.8	⑥突起は発達していると思われる ⑦市は狭い ⑧底広で台形中段は突出気味 ⑨球形に近い ⑩断面正面形が直線的 (安定性に乏しい) / ノミ痕らしい	B-2	B	B-1	図版10-8 特22-6
⑰	44 上部欠	28.1	5.0	2.2	4.6	4.2	12.1	17.8	7.8	16.4	14.9	43.1	⑥底広は違らない ⑦市は狭い ⑧底広で台形、棱はナシ ⑨市は広く中心は中央 ⑩断面正方形で長足 安定性に欠ける	C	A	B-2	〃 23-11
⑱	50 現在高	欠損	7.2	5.8	9.5	欠損	欠損	32.0	25.8	42.2			⑥棱の通りは明瞭、若干段を有す ⑦中央に球の中心、球形を呈す ⑧三方を塞いでいる。断面、平面共に正方形、各部が大型化する (従来いもといの) ⑨				
⑲	6 手形欠	30.5	6.4	3.0	5.5	4.9	10.7	21.0	9.8	18.0	16.1	35.1	⑩手形欠、下方は直線気味、突起は直線気味 ⑪直線気味 ⑫平面では長方形を呈す。底広の台形、棱はナシ ⑬幾分押し潰された感じ ⑭台形の断面、若干屈曲、安定性に欠如 ⑮	A	B	B-2	〃 22-2
⑳	27 (5分)	25.1	5.5	2.6	4.8	3.7	8.5	21.9	10.4	19.1	14.7	33.9	⑯三重形を呈し、突起はナシ ⑰直線的 ⑱底線化 ⑲断面正方形 若干幅長、全てが直線化しており、最も新しいものといえる ⑳	C	C	C	〃 21-18
㉑	9 (5分)	31.5	5.5	3.7	6.4	5.0	10.9	17.5	11.7	20.3	15.9	34.6	⑥丸味を帯びた桃形 ⑦内に溝曲す ⑧底広の台形、中央の後先端は突出 ⑨押し潰された様な扁平 ⑩断面は若干台形 正面は正方形 製作痕が著しくのこる	B-1	A	A	〃 22-5
㉒	5-2 (5分)	26.1	5.4	2.4	4.0	4.1	10.2	20.7	9.2	15.3	15.7	39.1	⑪丸味を帯びた桃形 ⑫比較的緩く下方へ続く ⑬直線的、若干複雑な台形 ⑭押し潰された形状だが、はっきりしないとならない ⑮断面正方形 幅長で、安定性	B-1	A	C	〃 23-12
㉓	1 (5分)	28.4	5.3	3.1	5.1	5.5	9.4	18.7	10.9	18.0	19.4	33.1	⑥突起は明瞭に表現されない 丸味をもつ桃形 ⑦骨盤しながら下方へ ⑧底広の台形、中央に棱をもつ ⑨中央に球の中心、球形を呈す ⑩断面正方形	B-1	A	A	〃 23-10
㉔	33 現在高	欠損	欠損	7.2	6.0	9.9		31.2	26.6	43.0			⑪楕円で、台形 ⑫若干押し潰された球、中心をみがき平滑にしている ⑬断面正方形、横に若干広がる ⑭中央に球の中心、球形を呈す				図版10-4 特24-22
㉕	43 (5分)	23.9	4.9	3.0	5.2	3.2	7.6	20.5	12.6	21.8	13.4	31.7	⑥丸味を帯びた桃形 ⑦受け凹い、内側し上方へ ⑧直線的、台形 ⑨押し潰された球形 ⑩平面、断面共に台形 上方で緩				〃 24-24
㉖	61 (5分)	25.1	欠損	3.2	6.9	5.9	9.1	欠損	12.7	27.5	23.5	36.3	⑪接続部は丸味 ⑫比較的狭い ⑬底広の台形、中央で棱 ⑭球に近い ⑮正方形の断面 横に広い正面				〃 24-23
㉗	30 (5分)	18.9%	10.7	16.2	24.4	29.9	20.6	11.6	17.1	26.6	32.6		⑥丸味を帯びた桃形 ⑦受け凹い ⑧根元、中稜は突出 ⑨球に近い ⑩断面長方形、縦に広がる / ノミ痕明顯 比較的安定性	A	A	A	図版10-2 特22-4
㉘	5-1 (5分)	32.8	6.2	3.5	5.3	6.0	9.8						⑪突起は無い丸味を帯びた桃形 ⑫外側し下方へ ⑬底広台形、中稜は突出 ⑭球形 ⑮台形、正面は正方形 若干正方形 ⑯	A	A	B-1	〃 22-3
㉙	16 (5分)	28.9	5.0	2.4	5.1	6.6	9.8	17.3	9.0	17.6	22.8	33.9	⑪丸味を帯びた桃形 ⑫若干外側し下方へ ⑬直線的、棱ナシ ⑭直線化 ⑮断面は歪みが著しい正面正方形 ⑯設置部で考えられよう				〃 21-16
㉚	17 (5分)	23.4	5.4	3.2	4.2	3.5	7.1	23.1	8.5	18.0	15.0	30.2	⑥丸味をもつが焼れた形 ⑦若干外反 ⑧直線的、棱ナシ ⑨押し潰された球形 ⑩断面正方形、横に広い 安定性に欠ける				〃 21-15
㉛	20 (5分)	3.2	4.8	3.8	6.8	17.0	14.3	21.4	17.0	30.4			⑪三角形を呈す ⑫変曲と一体化し、境界わからぬ ⑬直線化 ⑭直線化 ⑮断面は若干長方形、正面正方形 安定性欠如				〃 21-17
㉜	29 現在高	6.0	3.1	4.8	5.2	欠損	31.4	16.2	25.1	27.2	欠損		⑥若干のひ、直線化 ⑦外反 ⑧底広の台形、上方に棱 ⑨ソロバン玉様の球				〃 24-21
㉝	4 (5分)	25.8	4.2	3.6	4.3	5.6	8.1	16.3	14.0	16.7	21.7	31.4	⑩丸味を帯びた桃形 ⑪受け凹い ⑫下方に向かってのカーブが特異的、中段は突出 ⑬中心は若干上方、ソロバン筋質	A	B	B-1	〃 23-13
㉞	19 20.6	上部欠	5.5	3.0	7.3	4.8	欠損	26.7	14.6	35.4	23.3	欠損	⑭完全な桃形 ⑮受け凹い ⑯下方に向かってのカーブが特異的、中段は突出 ⑰中心は若干上方、ソロバン筋質 ⑱在地形の在り方は全く違う造りであり、輸入品と思われる	A	A	A	図版10-1

第6表 一石経石 石質及び字の一覧表

No.	種類	字	最長×最短×厚さ <small>(mm)</small>	No.	種類	字	最長×最短×厚さ <small>(mm)</small>
1	砂岩(?)	空／梵字	45.7×34.3× 3.8	36	泥 岩	／梵字	29.6×20.4× 6.6
2	砂 岩			37	泥 岩	□/□	31.4× □ × 3.2
3	泥 岩	道／梵字	45.1×28.1× 8.0	38	泥 岩	□/	33.9×26.1× 7.0
4	泥 岩	作／梵字	41.3×22.7× 4.6	39	砂 岩	／梵字	64.8×49.4×18.2
5	砂 岩	八／梵字	33.8×31.3×12.1	41	変成岩	彳／梵字	54.7×45.8×18.7
7	砂 岩	泵／梵字	4.5×27.1× 6.1	42	砂 岩	高／梵字	54.8×45.0× 7.7
9	砂 岩	／梵字	32.0×27.8×10.9	43	泥 岩	／梵字	52.0×45.8×18.4
10	泥 岩	／□	53.5×39.3× 7.9	44	泥 岩	／梵字	54.8×43.1× 8.2
11	泥 岩	佛／梵字	42.5×42.5×10.5	45	泥 岩	／梵字	49.7×38.0×11.2
12	砂 岩	／梵字	51.9×33.6×10.3	47	砂 岩	／梵字	53.2×38.5×13.8
13	砂 岩	／梵字	49.4×41.0×12.3	48	泥 岩	舍／梵字	37.2×30.0× 7.7
14	泥 岩	／梵字	45.4×37.0×14.2	49	泥 岩	／梵字	43.5×24.4× 7.2
15	泥 岩	冕／梵字	45.4×37.7×10.5	50	砂 岩	疑／梵字	33.6×24.7× 4.0
16	泥 岩	𠂇／梵字	42.4×37.0×10.7	51	砂 岩	時／梵字	28.0×25.0× 3.3
17	泥 岩	□/梵字	43.0×40.1× 9.0	52	泥 岩	?／梵字	62.9×13.0×16.7
18	泥 岩	𠂇／梵字	41.4×36.5× 9.3	53	砂 岩	𠂇／梵字	47.1×44.7×21.0
19	泥 岩	𠂇／梵字	38.7×34.7× 9.9	54	泥 岩	／梵字	44.4×30.0× 4.3
20	砂 岩	／梵字	46.4×29.0×12.8	55	砂 岩	／梵字	49.6×36.9× 5.5
22	砂 岩	車／梵字	43.1×31.7×15.7	56	砂 岩	□／梵字	48.1×38.6×11.1
23	砂 岩	齒／梵字	39.9×29.9×10.4	57	変成岩	／梵字	54.8×36.6×11.1
24	砂 岩	／梵字	42.0×32.3× 4.6	58	砂 岩	／梵字	47.5×34.2×10.0
25	砂 岩	□/□	39.8×38.3×11.1	59	泥 岩	／梵字	46.7×33.0× 4.0
26	泥 岩	／□	37.8×32.6×17.0	60	泥 岩	供／	52.3×35.8×10.2
27	泥 岩	是／梵字	36.0×32.6× 6.0	63	泥 岩	／梵字	42.9×34.5×10.1
28	砂 岩	／梵字	42.9×36.1×15.5	65	砂 岩	者／	47.3×39.7×14.3
29	砂 岩	舍／	49.6×34.9× 7.7	67	泥 岩	溪／梵字	50.5×36.0×11.8
30	砂 岩	多／梵字	44.5×21.7×11.5	68	砂 岩	衆／	59.2×37.1×18.1
31	砂 岩	／梵字	38.9×35.0× 7.8	69	砂 岩	衆／	49.5×43.3×17.9
32	砂 岩	／梵字	44.4×36.0× 8.4	70	凝解岩	／梵字	69.8×67.0× 6.1
33	泥 岩	／梵字	39.6×35.1× 7.6	71	泥 岩	／梵字	54.0×47.9× 6.6
35	泥 岩	／□	33.3×28.3× 7.0				

mm、短径25mm、厚さ3.3mmである。

しかし最も多いのは、長径40~50mm、短径30~40mm、厚さ10~15mm前後のものである。

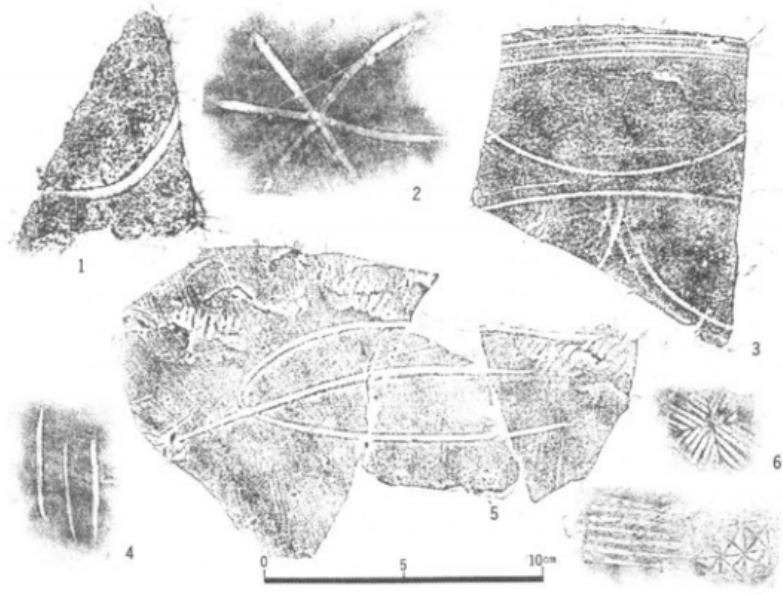
使われている石材については、墨書61点中、砂岩質 27点、泥岩質 31点、他は安麻岩等3点である。

経石は一方の面に楷書で経文の漢字が一字墨書きされ、その反対面に梵字を墨書きしている例が（No.1、3、4、5、7、11、15、16、17、18、19、22、23、29、41、42、48、50、51、53、56、67）の23点、漢字だけ認められるもの（No.29、60、65、68、69）5点、梵字だけ認められるもの（No.9、12、13、14、20、24、28、31、32、33、36、39、43、44、45、47、54、55、57、58、59、63、70、71）25点、漢字か梵字か不明であるが墨痕の認められるもの（No.2、10、25、26、35、37、38）7点である。

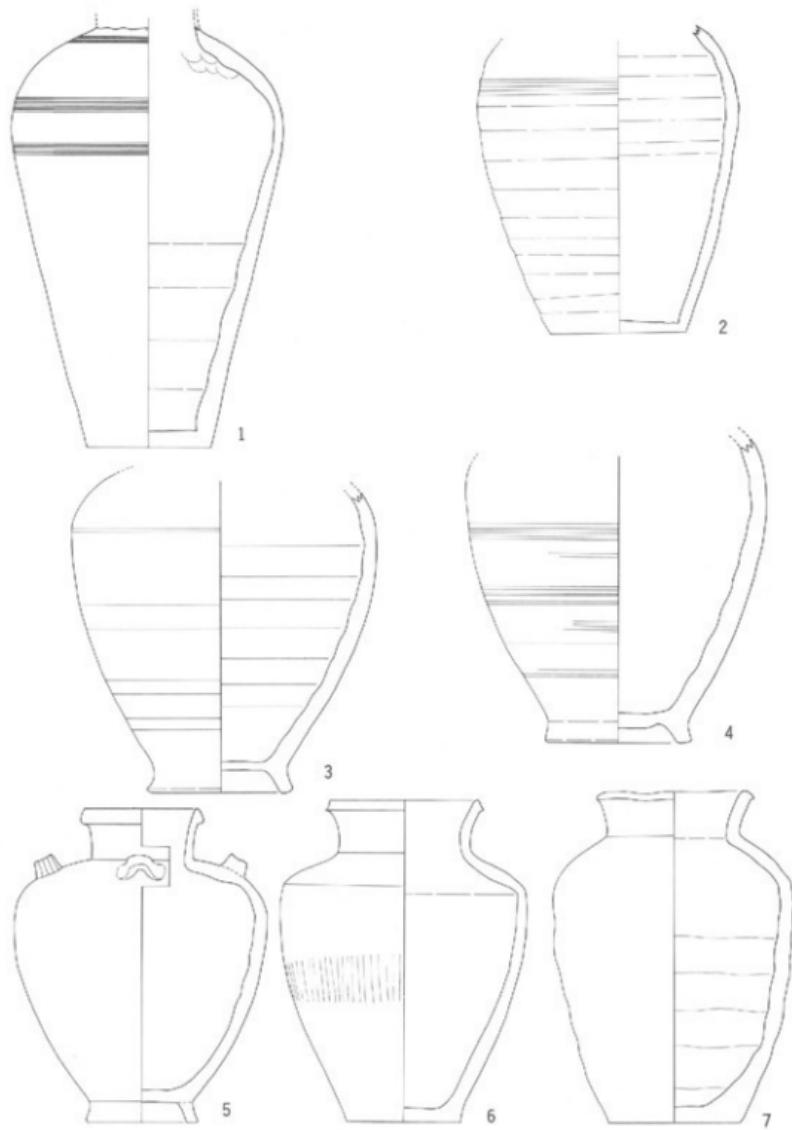
漢字は、空、道、作、八、果、仏、憂、其、軍、薩、是、舍、多、高、舍、疑、時、供、者、溪、葦、衆の22文字が記されている。

梵字の書体はまちまちであるが、々、39点不明 9点である。

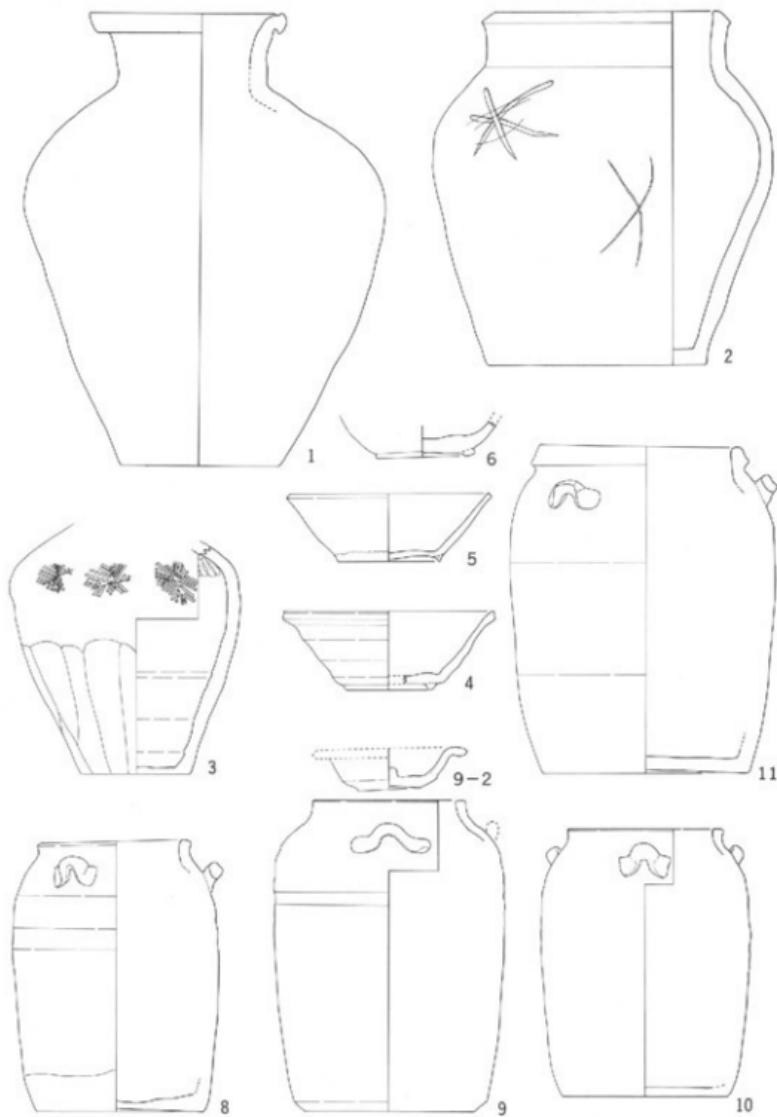
写経されている経文は文字が少ないので、明確でない。



第4図 運弁及び押印拓本 1-3.運文 5.ヘラ描き文(涅槃) 2-4.ヘラ描き文 6-7.押印(常滑)

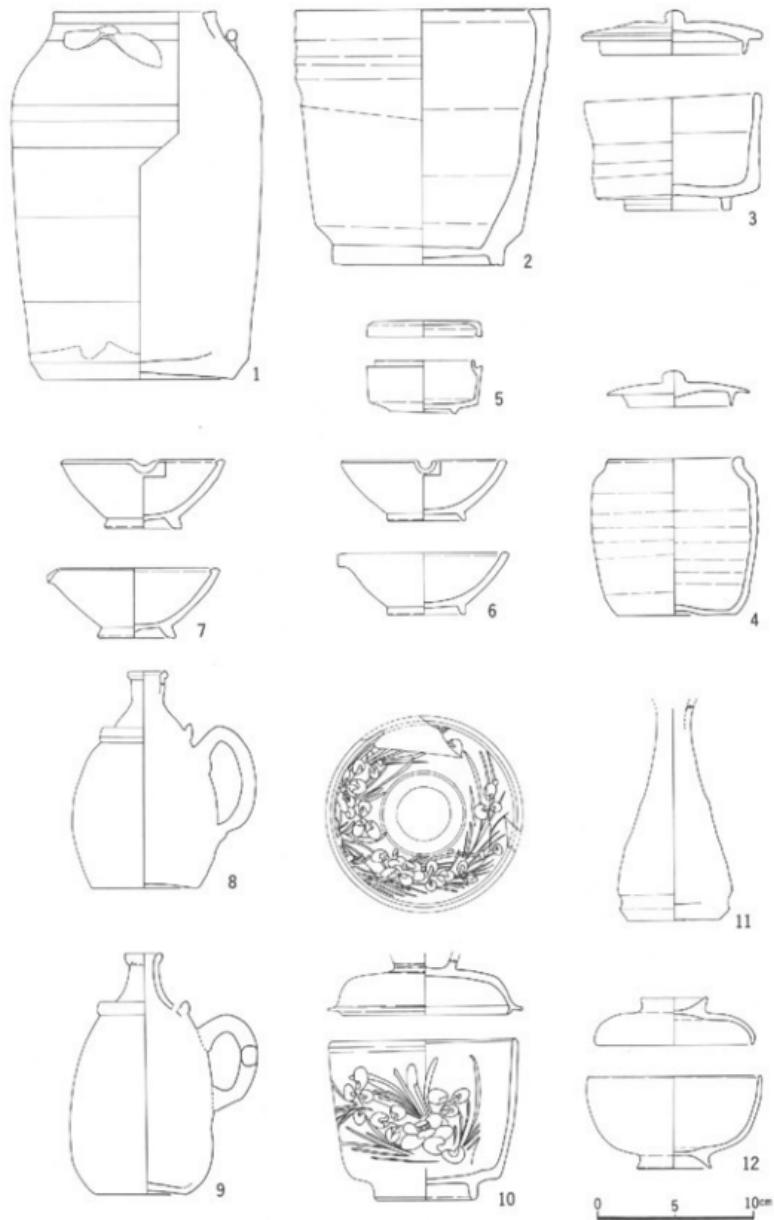


第16図 藏骨器 I

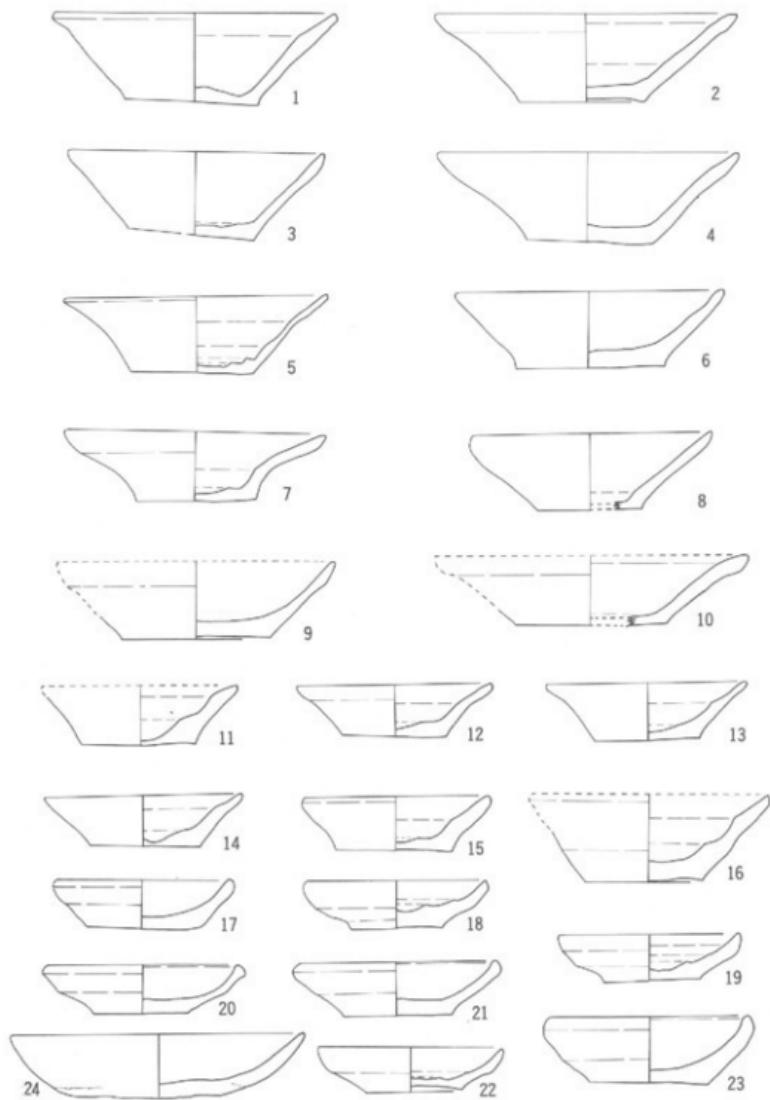


第17図 藏骨器II

0 5 10 m



第18図 藏骨器III



第19図 かわらけ実測図 I

I類 1~9 II類10~16 III類17~23

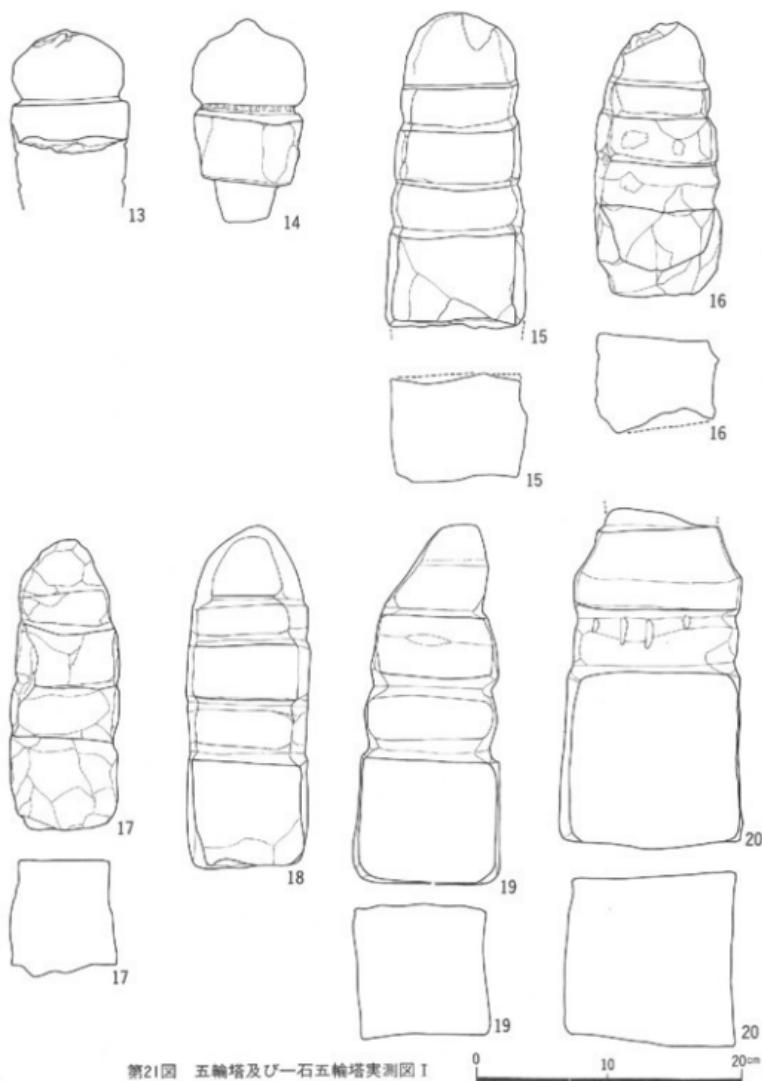




第20図 宝幢印塔実測図

0 10 20cm

- 1(No.29) 2(No.42) 3(No.24-2) 4(No.28) 5(No.24-1) 6(No.32) 7(No.34) 8(No.31) 9(No.40)
10(No.19) 12(No.26) 11(No.48)



第21図 五輪塔及び一石五輪塔実測図 I

13(No.36) 14(No.22) 一石五輪塔 15(No.17) 16(No.16) 17(No.20) 18(No.27) 19(No.7) 20(No.18)



第22図 一石五輪塔実測図 II



1(No.10) 2(No.6) 3(No.5-1) 4(No.30) 5(No.9) 6(No.8)

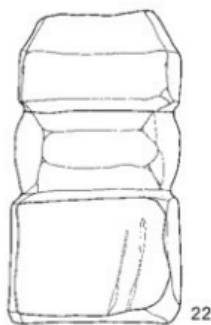


第23図 一石五輪塔実測図III

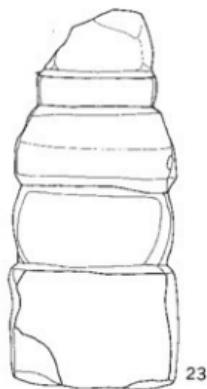
8(No.2) 9(No.12) 10(No.1) 11(No.44) 12(No.5-2) 14(No.3) 13(No.4)



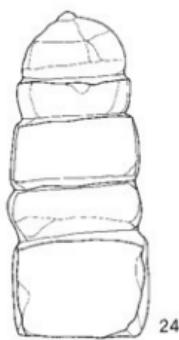
21



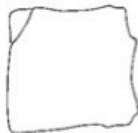
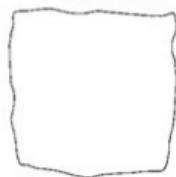
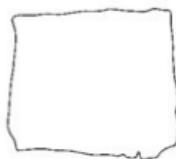
22



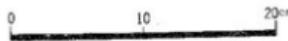
23



24



第24図 一石五輪塔実測図IV

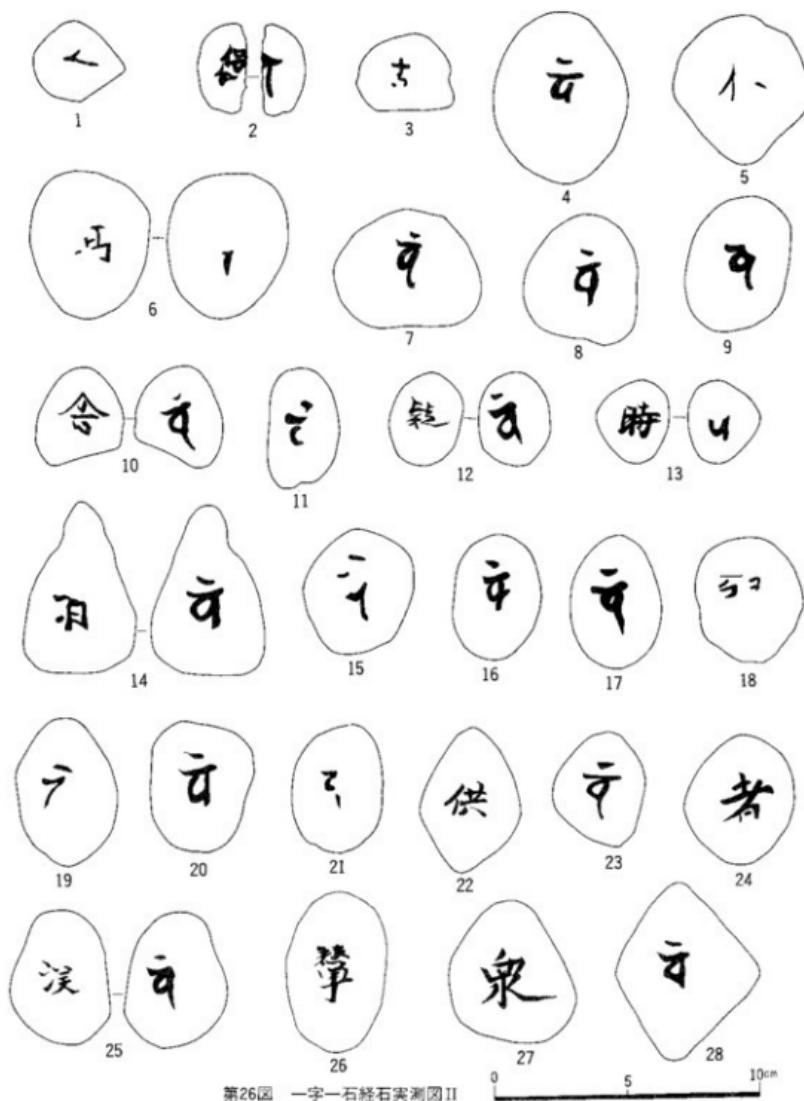


21(No.29) 22(No.33) 23(No.61) 24(No.43)



第25図 一字一石経石実海図 I

0 5 10cm



第26図 一字一石経石実測図II

5(No.41) 6(No.42) 10(No.48) 12(No.50) 13(No.51) 22(No.60) 24(No.65) 25(No.67)
26(No.68) 27(No.69)

VIII. む す び

本墳墓群における葬法は、中・近世墓は火葬が主体となっているが、近代以降はすべて土葬である。

近世墓中には少例であるが、Z 5—3号墓のような土葬墓も存在し、墓の形態・規模がずばぬけて立派で厚葬を示している。中世墓と確認できる土葬例は認められない。

墓の構造については、遺構で記述した如く多種多様であるが各時期を通じて共通する点は、いずれも盛土し墓丘を築く、高塚の系列に属している。

墓丘の規模については特に企画性は認められないが、中世墓は墓丘は低く、墓丘に小堀を敷き兆域としている点が特徴である。近世墓の墓丘は、一見、土饅頭風に見えるが、墓丘裾に方形の溝が掘られており、本来は基底部は方形を呈していたものと推定される。裾をめぐる溝は、墓丘の盛土用土砂採取の目的と併せて、兆域としての意味を有している。

埋葬方法は、火葬の場合は蔵骨器に納めて葬る例と火葬骨を墓丘中に直葬する例とが認められる。

本遺跡が歴代の墓地であり、後世の造墓によって副葬品を伴ない埋葬施設については時期を明確に知ることが困難である。

中世墓と認められるものは總て蔵骨器に埋納され、蔵骨器より時期の推考できないものに限定した。近世墓は日常什器としての陶磁器類を蔵骨器として転用している例が多いが、蔵骨器として生産された蔵骨器が18世紀代より出現している。

直葬については、埋葬用の特別の施設は設けられず、墓丘中に、少量の焼土、木炭片とともに細片に破砕された焼骨が埋葬されている。同一墓丘に一ヶ所だけでなく数ヶ所も埋納されている例も多い。これは、後世の追葬もあり得るが、墓丘を盛土する過程で何ヶ所かに分けて埋納したと考えられる状態で発見される点に注目したい。

火葬所と墓所について、火葬の場合は遺骸を火で焼き茶毬に付す火葬所が必要である。火葬^{火葬場}については、日本で最初の火葬^{火葬場}であるとされている、僧道昭の場合は、栗原、持統天皇は飛鳥岡で火葬されたことが「続日本紀」に記されているが、火葬の普及とともに各地の墓地に火葬所^{火葬場}が設けられたであろう。

天皇や皇族、貴族の火葬については、古くから、火葬用の籠やかが築れた記録があるが、一般庶民の場合は村落より離れた墓地の一角で火葬されたものであろう。

火葬所が即墓となる場合と別の場所に墓が作られた例とが認められた。

蔵骨器に埋納されたものは火葬所とは全く別に墓が作られているが、火葬施設等は発見されなかった。

直葬墓には、火葬所を即、墓とした例と別に盛土して墓を築いた例とが認められる。

墓丘の下に地山を掘込んだ土壙が発見され、土壙周囲は赤く酸化した焼土となり、土壙内に

は、木炭、焼骨が認められる。この場合も墓丘中に火葬骨が埋置されている例が認められる。^{注1}
火葬した土壤内に残された焼骨や墓丘に埋葬されている焼骨、さらに藏骨器に埋納されている
焼骨もいずれも細片に破碎されている点に特に注目したい。これは仏教の散骨の思想が継承さ
れている事証であると推考される。

俗信として「御舍利様」と称して骨の一部を仏骨として特別に扱う事例が遠江地方では普遍的
である。江戸時代の隨筆にも恵心僧都の仏骨の記事があるように巷間広く信仰されていたこ
とが推考される。本墳墓群の近世墓では、藏骨器内にさらに別の小容器を収め、この中に歯を
入れ特別に扱っている事例があるが、これも仏骨と同類の信仰であろう。

本遺跡は、中世以降、鎌田御厨領に属する村落の總墓として始ったものが、近世に引き続き19
ヶ村の墓地として現代まで造営されたものである。

中世・近世村落構造や墓制研究上、貴重な資料であるが、今後、さらに新しい知見にもとづ
く検討が必要である。

あとがき

仏教考古学の研究対象として、寺院址、仏像、仏具、五輪塔、宝慶院塔などの石造遺物につ
いては、先駆的秀れた業績が数多く発表されているが、大原墳墓群調査が実施された昭和42年
代には、近世墓が考古学の研究対象となり得るか否か、疑問視され、従って調査実例も乏しく
研究法も確立されていない未開拓の分野であった。

しかし、その後、中・近世の各遺跡が文献史学だけでなく、考古学的研究法で発掘調査が行
れ、「近世考古学」と呼ばれる研究領域が普遍化して来たのが学界の動向である。

未分化の時期の調査記録であり、現時点の調査水準からの史料批判には不備な点の多々ある
ことを認めざるを得ない。

当市内では、現在、一の谷中世墳墓群緊急調査を実施中であり、遺跡の保存状態も良好であ
り、かつ、大規模なものであり新しい知見が得られることは充分予測できる。本遺跡の考察は、
これらの新しい知見にもとづいて再検討されるべきであると考え、本報告書では資料の報告に
とどめた。

注1・II・III 齋藤忠著「墳墓」日本史小百科4 1978.

図 版



K4-3号墓（近世墓）石造品出土状態



K4-4号墓（近世墓）墓丘断面と集石遺構



N 8-12号墓（近世墓）集石、遺構



K 4-15号墓（近世墓）集石、遺構



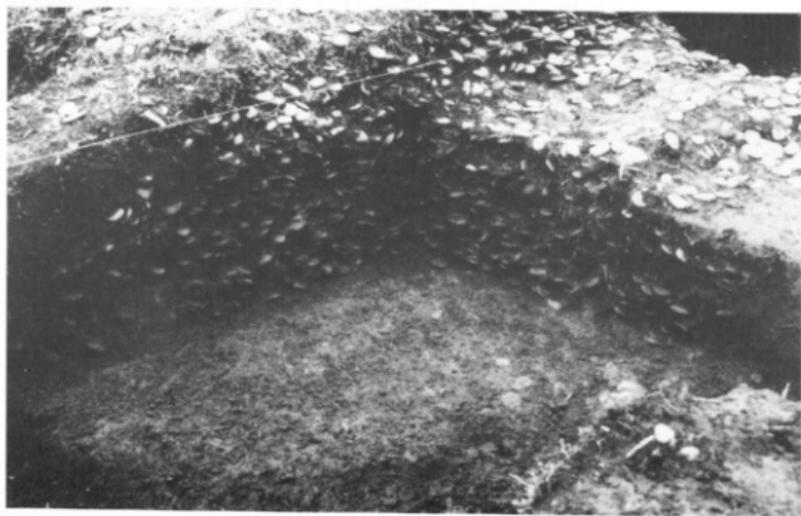
N 8-1号墓 墓丘集石遺構



K 13-1号墓 墓丘集石遺構



N17-2号墓 藏骨器出土状態



K13-2号 穴塚断面

図版第5 藏骨器 I



1



2



3



4



5



6

図版第6 藏骨器II



1



2



3



4



5



6



7

図版第7 藏骨器III



4



5



6



7



8

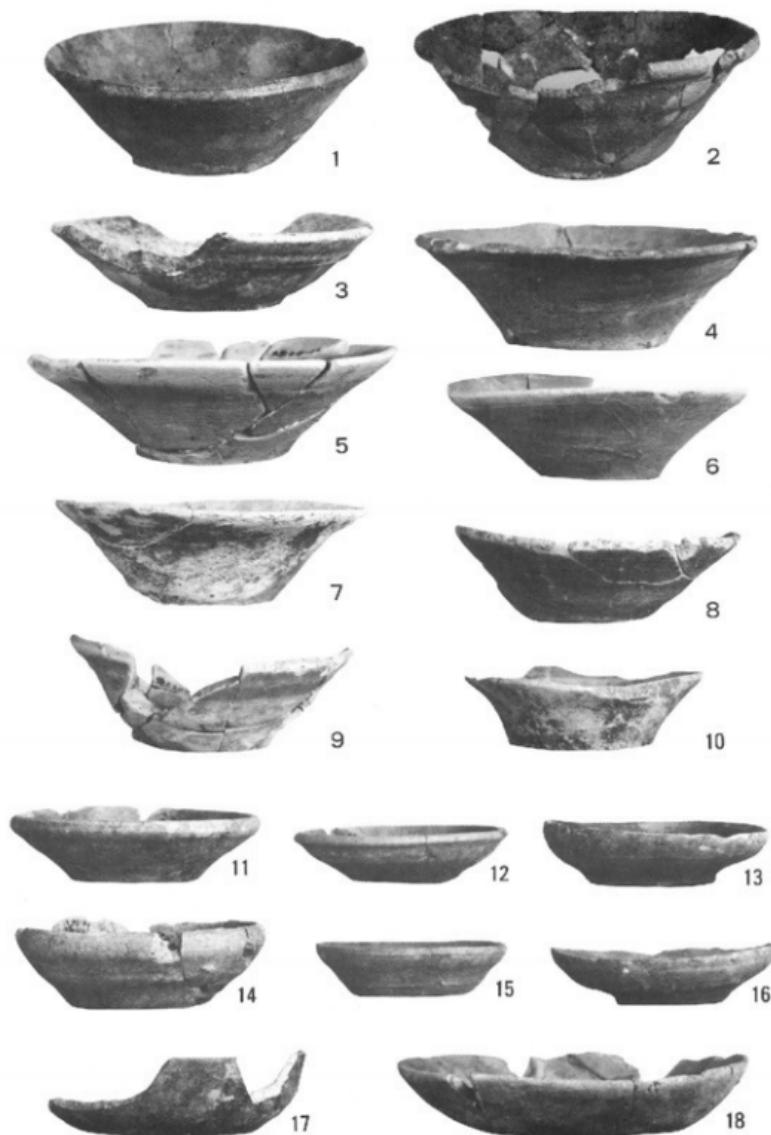


9



10

図版第8 山茶椀 かわらけ



I類 1~9 II類 10~11 III類 12~16

圖版第9 石造品 I



1



2



3



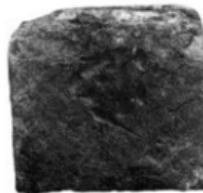
4



5

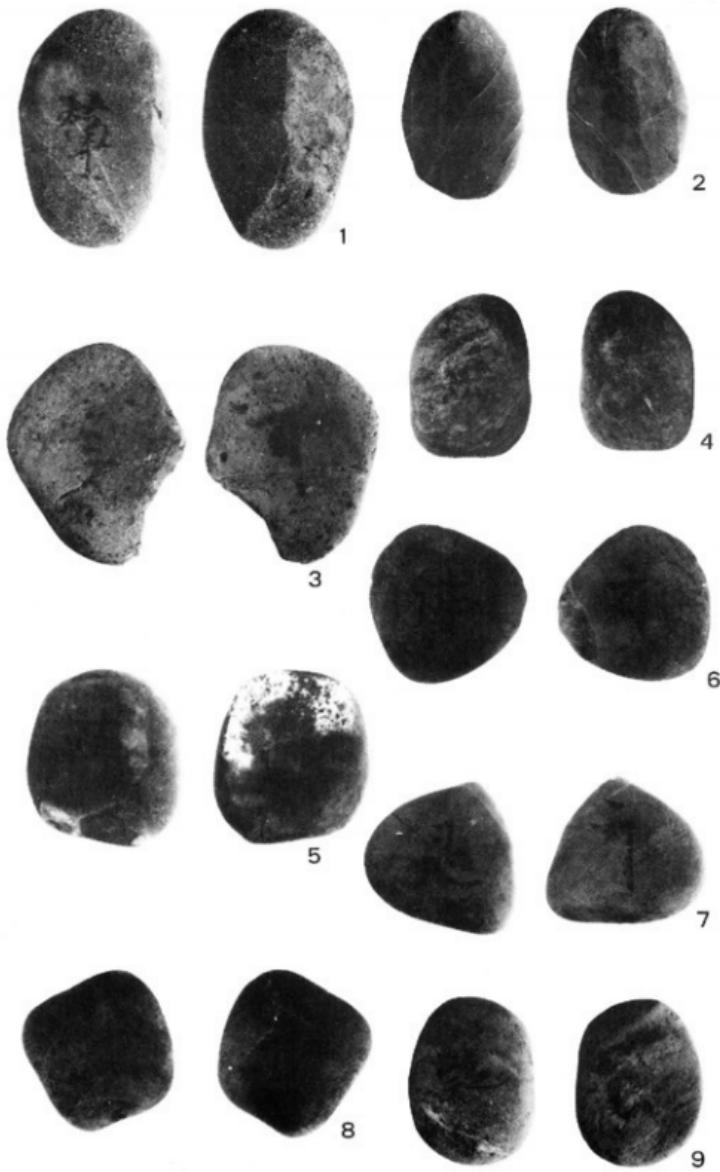


6



圖版第10 石造器II





1 (No.68), 2 (No.3), 3 (No.1), 4 (No.8), 5 (No.23), 6 (No.11), 7 (No.27), 8 (No.14), 9 (No.50)



1



2



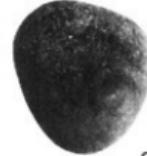
3



4



5



6



7



8

1 (No.69), 2 (No.4), 3 (No.22), 4 (No.19), 5 (No.60), 6 (No.51), 7 (No.30), 8 (No.7)

大原墳墓群発掘調査参加者名簿

本調査には下記の方々の参加協力を得たので改めて謝意を表します。

遠江考古学研究会

山村 宏、尾藤 晃、外山一夫、山下 晃、平野吾郎、増井義昭、青島芳明、鈴木久雄、池田 純、松浦哲二、齊藤美恵子、小沢泰代、傍島由美子、秋野京子、永田扶美子、宮本豊彦、他各位

国学院大学

柴田 稔、吾妻恵生、小林重義、松沢 修、岡崎雄二郎、田嶋明人、駒宮史朗、小松潮美、加藤七重、安本 収、桐田不二雄、大岩春夫、畠 俊博、出村義彦、山本各位

立正大学

野尻 優

磐田南高等学校郷土研究部、磐田北高等学校研土研究クラブ、磐田商業高等学校郷土研究クラブ、浜松女子商業高等学校歴史クラブ、誠心高等学校郷土研究クラブ

以上は調査日誌に記名のあった方々及び団体ですが、この他にも御協力いただいた方があつたことを併記させていただきます。

大原墳墓群調査報告書

昭和60年3月30日

発行 鰐田市教育委員会

印刷 株式会社 山田印刷所

